

X 20th PHASE

記 録



20th PHASE

芸術は
出会いから
はじまる

野外彫刻プロムナード20周年記念事業
～20th PHASE 芸術は出会いからはじまる～ 記録

発行 野外彫刻プロムナード展振興運営委員会
発行日 2021年8月
監修 宇納一公
編集/デザイン 梅本洋子
事務局 知立市 都市整備部都市計画課
知立市広見三丁目1番地
TEL:0566-95-0129

本書の一部あるいは全部を無断で複写・複製・転写することを禁じます

野外彫刻プロムナード20周年記念事業

〔 知立ライオンズクラブ創立55周年・知立市文化会館開館20周年・知立市制50周年 〕

はじめに

令和元(2019)年9月で、パティオ池鯉鮒野外彫刻プロムナード展は開催20回目を迎えました。

野外彫刻プロムナード事業は、パティオ池鯉鮒(知立市文化会館)のエントランスロードを中心に、県内の芸術系学部学科を有する大学の若手作家の作品を展示し、多くの方に鑑賞してもらう機会づくりとして始まりました。現在に至るまでに展示してきた120点を超える作品は、知立市のまちなみの一つとして、皆様楽しんでいただけていると思います。

20周年記念事業を実施するにあたり、より多くの皆様に芸術作品とのふれあいを通して、さらなる親しみを感じていただけることを願い、「芸術は出会いからはじまる」をテーマに、様々な事業を実施しました。

20周年記念事業は、市内外を問わず、多くの皆様が野外彫刻のある風景への愛着をもつきっかけづくりや、彫刻をはじめとした芸術に出会うことができる貴重な機会となりました。

この度、芸術との出会いの記録として、記念誌を発刊いたしました。この記念誌を読み返すことで、皆様と芸術との出会いを振り返っていただくとともに、ひと・まち・芸術の関わりについて考えるきっかけになれば幸いです。

野外彫刻プロムナード展振興運営委員会

目次

はじめに	01
ごあいさつ	03-04
野外彫刻プロムナード 20周年記念事業	05-06
記念展	07-18
パティオ池鯉鮒野外彫刻 プロムナード展のあゆみ	19-20
出前授業	21-24
フォトコンテスト	25-34
セレモニー	35-36
トークイベント	37-45
ワークショップ	46-48
彫刻清掃	49-50
おわりに	51-52
記念展準備・実行委員会組織図	53-54

ごあいさつ

私ども野外彫刻プロムナード展振興運営委員会では、市民の皆さまが文化芸術に親しめる空間の創出を目的に「野外彫刻プロムナード展」を毎年開催し、2019(令和元)年、第20回の節目を迎えることができました。これも皆さまの多大なるご理解とご協力のおかげによるものと、心より厚く御礼申し上げます。

この度の第20回記念開催では、「彫刻作品と“もっとふれあう”出会いづくり」をテーマに掲げました。ここでは、「ふれあいと出会い」がキーワード。野外に設置の彫刻・芸術作品達とのふれあい、そして、それらを通じた人々の出会いこそが、産・学・民・官の架け橋となり、芸術文化の薫る魅力的な発想と新鮮な活力とが生まれてくるものと確信しております。

「野外彫刻プロムナード展」の発足当時に皆さまが抱かれた「知立市がどんな景観になるのか楽しみだなあ」「知立市からどんな芸術家が誕生するのか楽しみだなあ」との思いを受け継ぎつつ、地域への想いを高める一助になればと考えます。どうか今後も末永く私ども「野外彫刻プロムナード展」にご愛顧を賜りますようお願い申し上げます。

野外彫刻プロムナード展振興運営委員会 委員長 森島 秀博

このたびは野外彫刻プロムナード展20周年を迎えられたこと、また20周年記念誌の発刊、心よりお祝い申し上げます。

野外彫刻プロムナード展は、平成12年に開館した知立市文化会館パティオ池鯉鮒に、知立ライオンズクラブ創立35周年記念事業として、モニュメントを寄贈したことから始まりました。以来20年にわたり、パティオ池鯉鮒のエントランスロードの両側の歩道に彫刻作品を展示しております。

知立ライオンズクラブは野外彫刻プロムナード展に対し開催当初から継続的に運営費の一部を支援してまいりましたが、市民の皆様が少しでも芸術に触れる機会が増え、そして心豊かな知立となる一助になれば幸いです。

最後に、野外彫刻プロムナード展が長きにわたって運営されてまいりましたのは運営委員会さまのご尽力によるものと感謝いたし、今後も開催が継続されることを祈念申し上げます。

知立ライオンズクラブ 会長 神谷 潤

アートによる「ものづくり」「人づくり」「まちづくり」をスローガンに、文化会館の開館以来、そのエントランスロードで開催されてきました野外彫刻プロムナード展が、ここに20周年を迎えられましたこと誠にありがとうございます。これも、作品を提供していただいた作家の皆様はもとより、関わっていただいた皆様のご尽力によるものと感謝申し上げます。

昨今の急速な社会変化の中で、人々の生活に楽しみや潤い、精神的な豊かさや活力をもたらす文化芸術の価値が広く認識されたことで、様々な文化を受け継ぎ、発展させ、新たな文化芸術の創造や普及が市民レベル、地域レベルで求められています。

ここ知立市においても、「知立市文化芸術推進基本計画」が策定され、「知る 育む 心を結ぶ 文化芸術を身近に感じるまちづくり」という基本理念のもと、文化芸術による豊かな地域社会の形成が進められているところです。「気軽にアート作品にふれあえる空間づくり」を目指したこの「野外彫刻プロムナード展」は、まさにこの計画の「誰もが鑑賞・参加・創造できる環境づくり」に向けた事業と言えます。この事業が、今後さらに充実し、継続されることを期待するとともに、末永く多くの皆様に愛されますようお祈り申し上げます。

一般財団法人ちりゅう芸術創造協会 理事長 加藤 達

平成12年の知立市文化会館パティオ池鯉鮒の開館とともににはじまった野外彫刻プロムナード展も、この度、開催20回目を迎えました。この20年で野外彫刻プロムナード展は、知立市の特徴ある風景の一つとなり、作家の皆様がこもった作品は、生活の中で身近に感じられるアートとして、市民の皆様が親しんでいただけているところと思います。ご尽力いただきました野外彫刻プロムナード展振興運営委員会の森島委員長や宇納顧問をはじめ、関係者の皆様方に心より感謝申し上げます。

平成27年には、知立市において「彫刻のある風景づくり推進計画」を策定致しました。この計画を基に知立のまちなかに彫刻作品がさらに根付き、市民の皆様が親しめる事業となるよう市政を推進してまいります。引き続きお力添えを頂きますよう、よろしくご願ひ申し上げます。

知立市長 林 郁夫

初めの一步は「夢」を語る旗振り役がいて、それに耳を傾け様々な思いと立場の中で賛同する人脈の形成により、それが実現され更に多くの支援・協働により幅広く展開されます。文化協会は、当初から文化会館の建設・運営のあり方に関わってきましたが、先人の思いは「文化の香りのする広場」の創出でした。多様な芸術文化の中で美術分野での会館建築設計の一例が、喫茶シエロから敷石の案内でエントランスロビーを買いて、かきつばたホールの壁面に空シエロが描かれ、館内通路には、創作壁面^{(*)1}が施されています。

文化会館の開館時に懸念されていたことのひとつに知立駅からのアクセスでした。そのため駅からの分かりやすい遊歩道があり、道路沿いには樹木・花や彫刻があり、楽しみながら、のんびり歩いてきてもらいたいという提案もありました。そんな折、開館と共に、幾多の尽力により「パティオ池鯉鮒野外彫刻プロムナード展」が企画・実践され、その波及効果としてパティオ池鯉鮒館内外、東海道松並木明治用水遊歩道、各所公園・池鯉鮒散歩みち沿い等に野外彫刻が設置され文化の香りが広がり、それらが知立の文化の一つの原風景になりつつあります。その風景からの出立を機会に長年開催しています知立市美術展公募・小中学生美術展への創作意欲が深まることを思い描いています。これからの継続は、今まで以上に熱意と意欲が必要ですが、市関連部署・関連機関・団体・個人との連携を深めることにより、文化の香りが一層拡がっていくことを期待したいと思います。

最後に、旗振り役^{(*)2}の宇納一公氏元知立市文化協会会長に敬意を表します。

*1 創作壁面「起土の万葉植物形態～知立の歴史と創造より～」伊藤公象 作

*2 知立市文化会館 文化情報誌 Pario Vol.8 2002「知立と私」～夢が実った彫刻の散歩道～宇納一公より

知立市文化協会 会長 薫田 八郎

野外彫刻プロムナード20周年記念事業記念誌の発刊まことにおめでとうございます。野外彫刻は、街の風物の一つとして、自然界の一部として溶け込んでいます。そして、市内のいくつものエリアにおいて、心の安らぎをいただけるのは、とても幸せなことです。

今回の記念事業でのフォトコンテストでは、野外彫刻とともに自然とマッチした大勢の人の笑顔がありました。また、小中学生が体験した「出前授業」では、多くの素材から世界に一つだけの作品が展示されてきました。制作過程では素材を生かし、自分の想いを表現しようと、様々な完成作品を想像して取り組んだことでしょうか。学校教育では、制作活動に加えて、彫刻をはじめとする文化芸術にこめられたメッセージを受け取り、勇気や喜び、悲しみなどの情操を育んだり、夢や希望を抱いたりするなど、心ゆさぶられる経験をしています。このように豊かな感性を育む教育はとても重要なことです。

文化芸術は、豊かな情操を育むことにあわせて、人と人の心をつなぎ、連携させる力があります。そして、過去(昨日)からの優れた伝統を引き継ぎ、現在(今日)の想いを表現し、未来(明日)を創り出し、人や時の流れに添って発展していきます。野外彫刻プロムナード展が、この輝かしい節目を契機にさらに文化芸術の創造と普及の場となることを期待しています。また、この事業に携わっていただいている皆様のご尽力に感謝するとともにますますのご活躍とご健勝をご祈念申し上げます。

知立市教育委員会 教育長 宇野 成佳

野外彫刻プロムナード20周年記念事業

知立市では、市民の皆様が身近に癒しや元気を感ずることのできる潤いのある風景づくりを目指して、彫刻作品の展示や管理、まちづくりへのアートの導入を推進しています。

作品展示を通して、作家同士や作家と市民の方々との出会いを創出してきた野外彫刻プロムナード展は開催20回を迎え、彫刻作品とふれあう出会いをつくりたいという思いから、「芸術は出会いからはじまる」をテーマに掲げ、造形作品に親しみを感じていただけるよう、記念事業を実施しました。彫刻清掃や愛知教育大学の先生をお呼びした出前授業のほか、中心事業である記念展では、彫刻、絵画、小中学校出前授業で制作した鬼の焼き物や立体工作作品、フォトコンテスト応募作品の展示に加え、セレモニー、記念展出品作家によるワークショップ、トークイベントを行いました。作品を近くで「観る」、自分で作品を「つくる」、作家の想いを「聴く」、作品に「触れる」機会は、よりの多くの皆様と芸術との出会いにつながりました。

野外彫刻プロムナード20周年記念事業 一覧



20th PHASE

野外彫刻プロムナード 20周年記念展

芸術は
出会いから
はじまる

開催期間 | 2021年2月9日[火]～14日[日]
開催時間 | 10:00～18:00 (最終日のみ17:00まで)
会場 | パティオ池鯉鮒 (知立市文化会館)

主催 | 野外彫刻プロムナード展振興運営委員会
共催 | 知立ライオンズクラブ、一般財団法人ちりゅう芸術創造協会
後援 | 知立市商工会、知立ロータリークラブ、知立市文化協会、知立市教育委員会、知立市



【記念展 A4チラシ】



【フォトコンテスト A4チラシ】



【ワークショップ A4チラシ】

記念展タイトルについて

PHASE(フェーズ)とは、「段階」の英語で、変化・発達段階、局面、時期という意味があります。特に、何かが成長過程にある中での段階を指すことが多いと言われています。
今回の記念展は、5年、10年と段階を経て、20周年を迎えたことを記念する展覧会であり、今後、25年、30年と成長していくことを目指し、この名称に決定しました。開催される2020年度は世の中が大きく変化した年になりました。様々な出会いが、私たちにとても大切なことだったと改めて実感いたしました。そして、現在までのプロムナード展覧会事業を通して様々な出会いがありました。それは市民の方々が作品と出会うということだけでなく、(作り手の)私たち作家も様々な出会いをし、新たな作品づくりに生かされ、新たな出会いを生むことと一緒です。今回の記念展が、新たな出会いのきっかけとなることを願って、このタイトルとしました。

期 日 | 2021年2月9日[火]～14日[日]
 会 場 | ギャラリー、エントランスホール、茶室「知心庵」、光のパティオ、リハーサル室3
 出品者 | 49名

野外彫刻プロムナード展では、2000年よりパティオ池鯉鮒（知立市文化会館）のエントランスロード両側の歩道において、毎年6点ずつ彫刻作品を入れ替えながら展示してきました。記念展 20th PHASE「芸術は出会いからはじまる」では、プロムナード展の歴史を振り返っていただくとともに、作品ひとつひとつを間近で鑑賞いただける機会づくりを目的に、これまでに出品していただいた作家を中心に49名が集い、61点の作品が展示されました。会場には多くの皆さまにご来場いただき、作品をじっくりと鑑賞していただきました。

ギャラリー



エントランスホール



茶室「知心庵」



光のパティオ



リハーサル室3



ギャラリー



加藤 真也 KATO Shiya
「Minimal Identity」 5種類の石
世界各地の石を20cm角にカットし、そこから削り磨きあげた。同じ制作工程、同じ大きさにしても、各々の石に消し去れない個性がある。



宇納 一公 UNO Kazuhiro
「ナオミ」 F.R.P.
学生時代に精確に作ったもので、モデルから受けた印象を逃さずことなくイメージに近い形に出来たと、若い頃の思いを今でも大切にしています。



萩原 清作 HAGIWARA Seisaku
「裸婦」 石膏
具象彫刻は、人間(裸婦等)や、生き物の形を通して生命の形を彫塑、又は彫刻という方法、手段、素材によって表現します。



神谷 瑞季 KAMIYA Mizuki
「Secretariat」 F.R.P.
制作から8年が経ちました。馬のおかげでまた先生や友だちに会うことができました。この馬がつないでくれている出会いに感謝します。あの場所での先生とあの友だちとこの馬を作れて本当によかったです。

森 有希 MORI Yuuki
「習作『春に漂う』」 銅金、糸
今まで自分の作品を家に飾ったことがなかったので、生活の中に溶け込むようなものを作ろうと思いました。
沢山ある刺繍糸の中から、心が温かくなるような色を選びました。



宇納 一公 UNO Kazuhiro
「機織り池から」 石膏
池廻りのむかし話の中に、新林町の機織池伝説があります。きつねの周りをテーマにして、反物を巻いている様子を表現してみました。



石川 博章 ISHIKAWA Hiroaki
「風景の座'20-Sep. 黄セットI (バカ土による陶のフレーム)」 陶、木
「風景の座'20-Sep. 黄セットII (バカ土による陶のフレーム)」 陶、木
20年前に出品したブロンズ作品《風景の座》を継承する最新作エスキースです。今回は陶によるフレームという構想で、実際に使う素材であるバカ土(三河土)を使い、黄セットをかけて焼成しています。



浅野 卓司 ASANO Takuji
「Blow Wind Blow (風よ吹け)」 石
四角い窓の向こうから吹いてくる風を、あなたはどのように感じますか？明日の風の音を感じるならば、自然と一体となった自分の存在に気づくと思います。



安孫子 夏代 ABIKO Natsuyo
「小面」 木
能面との出会い。能面の世界もまた興味深いものです。



米山 朋作 YONEYAMA Housaku
「彗星」 石膏、紙、ミクストメディア
せめて彗星の様に一瞬だけでも輝こうとしても、ただただ私になるばかり。



鑑山 麻裕 IKAKEYAMA Mayu
「コイサギ」 銅
日本人の生活の中に立体作品が入り込む方法を探しています。用途のあるものであればどうだろうかと考えて作った習作の一つです。背に器のあるものを作ってみました。

鑑山 麻裕 IKAKEYAMA Mayu
「羊」 銅
日本人の生活の中に立体作品が入り込む方法を探しています。用途のあるものであればどうだろうかと考えて作った習作の一つです。背に器のあるものを作ってみました。





鬼頭 正信 KITOH Masanobu
「風の踊子」 銅
踊子の伸びやかな一瞬の身体を銅の鍛金技法で制作。金属板材の張りのある造形として表現。



鬼頭 正信 KITOH Masanobu
「RT & RTG」 銅
「鍛金」技法で使う「当て金」の改良を研究してきた。その現状報告。

池崎 友加里 IKEZAKI Yukari
「親子」 木
鳥の親子をイメージして製作しました。顔を寄せ、仲のいい雰囲気表現しています。



古賀 一弘 KOGA Kazuhiro
「虹」 木
いろんな感じ方がある

佐藤 千恵 SATO Chie
「黄色い花」 陶
植物の維管束(導管)にスポットを当てています。養分を運び、全体を流れる、それは、人体でいう血管、又社会でいうコミュニケーションツールの様なもの。上手にめぐって、生命維持や社会情勢の安定に欠かせない機能を果たすもの。



小島 雅生 KOJIMA Masaki
「ふたたび廻る風景」 フロンス鉄
自由にカタチを成し、手の感覚がそのまま伝わるロウ。約1200度で溶解された、透きとおる程美しいフロンス。これらの素材と「ロウ型石膏鋳造」という技法のチカラをかりて、無意識の中の記憶や心象風景などをカタチにしてみました。

近藤 均 kon-kin
「Story」
大理石、黒御影石、ベニヤ板
雨の日に水たまりにできる波紋がとてもきれいで大好きです。その波紋を自身の心の波紋に置き換えて、穏やかな時もあり動揺する時もあります。そんな波紋を人生の物語りとして表現しました。



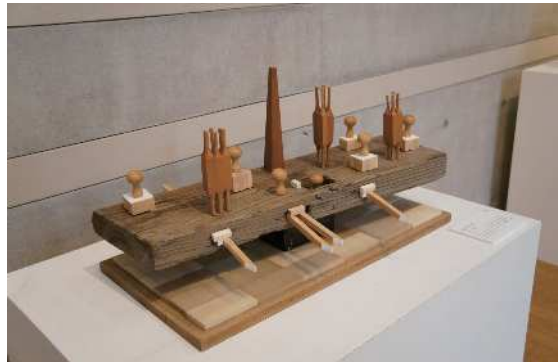
近藤 均 kon-kin
「石まんだら」
大理石、黒御影石、ベニヤ板
曼陀羅は、密教の根本教典ですが、その宇宙感がとても好きです。下にぶら下がる玉は人間の煩悩です。

近藤 均 kon-kin
「Spiral 3」
大理石、黒御影石、ベニヤ板
SpiralとMöbiusは、私のなかで球も含めてとても重要なテーマです。単純にきれいなフォルムを追求した作品です。



大江 慎一郎 Ooe Shimichiro
「困ったじいさん」 色紙
現在は漫画家として活動しているの、その活動の証に。

青島 芳明 AOSHIMA Yoshiaki
「愚か者の舟」 木
中世ヨーロッパ、ベスト柄に乗り、舟で地中海に逃げ出した人々の哀れをイメージし、10数年前に構想したもの。現在の世相につながるものとして再構成して発表させていただきます。



宮本 美代子 MIYAMOTO Miyoko
「妖異心臓」 張り子紙、石膏粘土等
不思議で異様な家(人形)も心から向き合い、語り合えばどこか愛しいもの。現実と異空間を行ったり来たり、迷いも喜びもすべてが生れの証。もの言わぬ人形に語りかけてみるのもおもしろい。

加藤 恵美 KATO Emi
「Dear Dad」
トチ、サクラ、真鍮
ちょっと前まで何でもしてもらっていた赤ちゃんか、いつの間にか何でも一人でできるようになり、「今度は私がやってあげるね」と大人びた顔つきに。エリック・カール作「パパおつきま」とって」へのオマージュです。





石原 秀雄 ISHIHARA Hideo
「山百合と五芒星」 御影石(作品)、砂岩(台座)
山百合や 織地獄ある 石彫場



長谷川 厚一郎 HASEGAWA Kouichi
「私の好きな形」 石、鉄
イメージの転換。当たり前だと思っていることに疑いを持つこと。



林 幹久 HAYASHI Mikihisa
「New Awakening」 レジン
新たな覚醒——それは“今”!!



竹本 鉄夫
TAKEMOTO Tetsuo
「箱になりながら歩く男」
梅
現代の管理社会を箱に置き換え、その箱に
同化しながら歩く男を表現した。



梅本 洋子 UMEMOTO Youko
「ひ・み・つ」 F.R.P.
人と人とのつながりを思いながら作りました。



深田 庸子
FUKADA Yoko
「乱反射」 楠、チーク
人が五感で敏感に反射
反応しているとき、同じ
様に無意識下で乱反射
がおこっている。私は
そのゆっくりと少しずつ
変化していく乱反射を
感じたいと思った。



町野 紗恭
MACHINO Sako
「農夫」 セメント
利害ある自然とともに
生きる農夫の強さを
表現しようと思いま
した。



篠田 美有 Shinoda Miu
「2020」 油彩、キャンパス
制限のある不自由な生活、経済的、治安的、健康面の不安を抱え
ながらも嬉しいこともあった1年を振り返り制作しました。



葉山 亮三 HAYAMA Ryozo
「Fit fitter fittest」 石膏
これは石膏の立体手形。自分のものが最もなじむ。しかし、誰かの手にもなじむかもしれ
ない。見知らぬ誰かと触覚からつながる感覚。コロナ禍にあって、触りあうということは
難しい。だからこそそのリマインド。



中山 友希 NAKAYAMA Yuki
左・中央「内と外」 銅版画
子どもが生まれてから、世の目が違う形
で気になるようになった。誰かから見え
ている私の積み重なりと、何にも染まり
たくない私について考えた。

右「うさぎ山」 銅版画
作りたい形を探している途中で。寄り
道も多いけれど手は動いています。

加藤 マンヤ KATO Many
「United」 ミクストメディア
現代の社会のメタファーとして

岡本 真由子 OKAMOTO Mayuko
「覗き込む石鯨金魚」 インスタレーション、ミクストメディア
体・技術・関係に生きる私=現実を、彫塑・漫画・ARで生きる作品=仮想に
写像しています
本作品は、石鯨金魚(撮ると泡を出す特別な金魚)をテーマに、漫画と
彫刻がAR上で融合する世界を表現しました。



江村 和彦 EMURA Kazuhiko
「Oh! I'm...2021」 陶
古代又は未来か、どの時代にあってもココロニル、ここにいたい、痕跡は意思は消せない。



エントランスホール



加藤 真浩 KATO Masahiro
「#24」石膏
自分自身の中に強く残るモノや人物をモチーフにした彫刻を製作しています。



藤田 雅也 FUJITA Masaya
「大地から-21」石
石は、大地からの産物であると捉え、「生命」や「誕生」をテーマとした彫刻制作を追究しています。

西村 志磨 NISHIMURA Shima
「SEED 2020」陶
自然にあるモノの形はとても興味深いものばかりです。その形からイメージを広げて作品を作っています。



岡村 明 OKAMURA Akira
「森の記憶」椎
斜め3方向からクロスする角材が作り出す、凝縮した塊の面白さを試したら、多肉植物のようなギザギザ彫刻ができました。ギザギザが作る光と陰は、想像を膨らませる魅力があります。



永江 智尚 NAGAE Tomohisa
「丑枕」テラコッタ
枕でスヤスヤと眠る千支シリーズの「丑年」の作品です。

小栗 絢子 OGURI Hiroko
「春を待つ」テラコッタ
裸婦像の連作の中のひとつです。自由な春が待ち遠しいですね。



柴田 茜 SHIBATA Akane
「地平」石膏
モデルとなった男性の、たくましさや力強さ、しなやかさを表現したいと思い、制作しました。力強く立ちながら、伸び上がるようなイメージを形にしたいと思い、分量バランスや構成を考えました。



大川 泰平 OHKAWA Taihei
「勇気と軌跡」木材、その他
最近の活動報告的な作品です。



加藤 伸之介 KATO Shinnosuke
「出発」楠
2018年度に、知立市内の学校にて1年間助めさせていただいたことがあります。そこで見て、感じた子どもたちの姿や心情、雰囲気私の中で昇華し、私の感情と学校への感謝の意を込めて、構成したフォルムを楠の丸太に造形しました。



永江 智尚 NAGAE Tomohisa
「暁」P.R.P.
夜半の苦悩から、夜明けに光明が差すまでを男性像で表現。



柴田 茜 SHIBATA Akane
「お昼寝」陶
老若男女から愛される作品になって欲しいと考え、昼寝をするシロクマを作りました。彫刻に少しでも親しみを持ってもらえればと思います。

木方 立樹 KIKATA Tachiki
「Morphic Unit」木、紙、オイル、水彩
内と外、かたちの物語 廻行としての制作



茶室「知心庵」



赤塚 寛 AKATSUKA Hiroshi
「種に就きて・golden corn」 木
品種改良種と原種をテーマに作品を作りました。

鶴飼 留美子 UKAI Rnmiko
「キセキ〜森と月と太陽と〜」
木(トウヒ)、和紙、針金
人と出会う
自然と出会う
物と出会う
これまでの軌跡
ここに在る奇跡

町野 紗希 MACHINO Sakyō
「愛犬」石膏
愛犬が寝ている可愛らしい
姿を表現しました。



永江 智尚 NAGAE Tomohisa
「紐靴に牛」漆
日常に隠れている十二支たちの連作の一作。



本田 郁子 HONDA Ikuko
「丑の宴」陶
毎年、良い年になるようお願いを込めて十二支の動物を制作しています。今年は
皆で集まれるような楽しい日常が戻ることを願って。



原 歩 HARA Ayumi
「GIRLS WAR〜カイン・カン カテゴライズ on the TATAMI
ground〜」ブロンズ
「GIRLS WAR」をメインテーマに金属鍛造作品をつくって
います。今回は、茶室という文化絡みの空間で伝統芸(?)
or 慣習芸(?)とも見える組体模をする女子。臭い蓋を開け
るような、水を差すような、そんな作品であるといい。



光のパーティオ



松村 明育 MATSUMURA Haruyasu
「時 toki ori」鉄
刻々 時間は過ぎて行きます。

リハーサル室3



山本 辰典 YAMAMOTO Tatsunori
「miniature garden (Chiryū)」 ミクストメディア

出品者一覧 *50音順

青島芳明	赤塚 寛	浅野卓司	安孫子夏代	鑄山麻裕	池崎友加里	石川博章	石原秀雄	鶴飼留美子	宇納一公
梅本洋子	江村和彦	大江慎一郎	大川泰平	岡村 明	岡本真由子	小栗敏子	加藤恵美	加藤伸之介	加藤真也
加藤真浩	加藤マンヤ	神谷瑞季	木方立樹	鬼頭正信	古賀一弘	小島雅生	近藤 均	佐藤千恵	篠田美有
柴田 茜	竹本鉄夫	永江智尚	中山友希	西村志磨	萩原清作	長谷川厚一郎	林 幹久	葉山亮三	原 歩
深田庸子	藤田雅也	本田郁子	町野紗希	松村明育	宮本美代子	森 有希	山本辰典	米山勲作	

パティオ池鯉鮒野外彫刻プロムナード展のあゆみ

会場 | エントランスロビー

野外彫刻プロムナード展の経緯や歴史を辿るリーフレット、記念刊物のほか、特集された情報誌や新聞記事などの資料を展示するコーナーをつくりました。来場者の皆さまには、たくさんの方から野外彫刻プロムナード展のあゆみを振り返っていただきました。



<p>第1回 2000</p>	<p>第2回 2001</p>	<p>第3回 2002</p>	<p>第4回 2003</p>	<p>第5回 2004</p>
<p>第6回 2005</p>	<p>第7回 2006</p>	<p>第8回 2007</p>	<p>第9回 2008</p>	<p>第10回 2009</p>

<p>第11回 2010</p>	<p>第12回 2011</p>	<p>第13回 2012</p>	<p>第14回 2013</p>	<p>第15回 2014</p>
<p>第16回 2015</p>	<p>第17回 2016</p>	<p>第18回 2017</p>	<p>第19回 2018</p>	<p>第20回 2019</p>
<p>第21回 2020</p>	<p>2周年記念事業</p>	<p>5周年記念事業</p>	<p>10周年記念事業</p>	<p>15周年記念事業</p>

<p>知くらしのニュース 2005年11月18日発行</p>	<p>地域みっちゃん生活情報誌 「ちるくらぶ11月号(2018年)」</p>	<p>中日新聞(三河版) 2020年6月8日発行</p>	<p>中日新聞(三河版) 2021年2月10日発行</p>
------------------------------------	--	----------------------------------	-----------------------------------

*この記事は、株式会社中日総合サービス、株式会社中広、株式会社中日新聞社の許諾を得て転載しています。

知立市内の小学校・中学校を対象に出前授業を実施しました。授業で制作された作品は、記念展の会場にてお披露目されました。小学校では、着色した枝とカラーモールを使用して、知立に住む友だち(校内や校外の友だち)みんなが楽しめるようなテント村をつくりました。図工が得意な児童も苦手な児童も普段の授業とは違った素材体験に苦戦しながらも楽しんで取り組んでいました。

八ツ田小学校6年生 立体工作作品展
会場 | 花しょうぶホール ホワイエ

【講師コメント】

小学校では、形や色や素材の特徴を活かし、造形方法を工夫する力を培うことをねらった。枝を縦横無尽につなげ、友だちの作品と合体させる児童や、何本もの針金で塊をつくる児童など、創造性豊かな姿が見られた。



永江智尚先生



[展示の様子]

野外彫刻プロムナード20周年記念事業「出前授業」記録
八ツ田小学校6年生 立体工作作品展

ともだち 集まれ! 知立のテント村

講師：永江 智尚氏 (愛知教育大学 美術教育講座 准教授)
対象：八ツ田小学校 6年生 2クラス (56名)
日時：令和3年1月14日(木) 9:40 ~ 11:30
場所：八ツ田小学校 体育館

制作工程

1 枝を集め、着色する (事前準備)

2 モールを使って、枝をテントの形に組み立てる。
→ 基本形は、三角錐、四角錐、三角柱



3 2で作ったテントにオリジナルの飾りをつける。



4 完成!



いろんな素材を使って作ったよ!



■出前授業の感想(アンケートより抜粋)

- ・この授業をやっても楽しかったです。枝と枝をつけるのが、とてもむずかしかったです。またやりたいと思いました。
- ・私は初めて枝を使って図工で作品をつくりました。なので今までやったことなかったことを体験することができ、よいけいけんになりました。
- ・木やモールを自由に組みあわせる、こんなにも、立体的になり、おもしろく作れることが分かりました。
- ・木とモールでいろいろなものをつくることができた。多くの木をつかって高くしたりできた。モールだけで作ることもできた。
- ・モールで枝と枝をつなげることは発想がなかったので、先生が言ってくださったとき参考になりました。工作にかぎらず、枝と枝のむすび方は勉強になりました。
- ・枝でこんなにカラフルできれいな作品ができるんだとおどろきました。また、枝を作品にするという発想が面白いなと思いました。
- ・私は図工が好きで家でよく物を作っていますが枝や、モールでなにかを作るという発想はありませんでした。今後物を作る時はさんこうにしてみようと思います。
- ・いろんなえだの組みかたや、いろんなモールのつかいかたがわかってとても楽しかったです。
- ・自分で考えて自分の作品を作れたので楽しかったです。また、モールを木にうまくつけるのが大変でした。
- ・きまりは「テント」だけだったので自由にできて、本当に今までの図工の中で楽しかったです。
- ・今回は2時間ぐらしかできなくて、何時間、1日でもできた気がして楽しかったです!木でテントを作るという発想もとてもいいな!と思いました。
- ・1人1人にお話してくれて、とてもたのしかったです。今日のことをきっかけに、図工の時間などでいきたいと思います。
- ・先生たちのアドバイスもあり、とてもいいものが見つくて楽しかったです。固定観念をこわすという考えを知った。そんな考えがあるんだと気づき、面白かった。
- ・もう少し時間を延長してほしかったです。木をモールでつけるのが大変だったけど達成感いっぱいでした。
- ・三角すいの見本をみせてくれたのでとても分かりやすかったです。
- ・テントの形に作りたていけいけいではなく、自由に形を決めて楽しかった。
- ・最初の構想とはちがったけどその分ちがった楽しみ方が分かったのですごく楽しかったです。
- ・すぐ自分の思うように出来たうれしかった。最初は不安だったけど、満足いくようにでき、うれしかった。
- ・あまりこうゆうことをやらなくて、今日の貴重な体験がとても勉強になりました。
- ・自分なりの表げんのしかたができたのでとても楽しかったです。
- ・少し難しかったけどいろんなことを考えればできたので楽しかったです。
- ・つくるのは、とちゅうからこつをつかんでかんたんでたのしかったです。これをお父さんやお母さんに見せたいです。くふうして、ブラジルのこっきをつくりたい。
- ・よくはなしかけてくれてしゃべりやすかったしアイデアのヒントをおしえてくれるので作りやすかったです。

■教えてくれた永江先生へ (アンケートより抜粋)

- ・すごく楽しかったし、またやりたいと思いました。今回はありがとうございました。
- ・今日はありがとうございました。すぐたのしかったです。個性を生かしておもしろかったです。
- ・とても分かりやすくてとても楽しかったです。ありがとうございました。
- ・くわしく教えてくれたり、案をだしてくれたり、とてもわかりやすかったです。
- ・モールで枝の組み方をわかりやすく、くわしく教えてくださりありがとうございました。
- ・すごく先生たちの話がうまくて分かりやすかったです。
- ・ここをこうするといふなどと、教えてくださいましたので、楽しくうまく作ることができました。
- ・作り方を教えてくださいありがとうございました。おかげで楽しく作品を作ることができました。アドバイスも参考になりました。
- ・自由にやれて、作品のいいところなどをいってくれてありがとうございました。
- ・教えてくれてありがとうございました!!横を通るたびに「いいね!」「おもしろい!」などほめてくれてうれしかったです!ありがとうございました。
- ・作品を作っているときにアドバイスをくれたので、とてもいい作品を作れました!うれしかったです。
- ・今日はいそがしい中教えにきてくださり、ありがとうございました。これからも、ちょうこくをがんばってください。
- ・私たちのために八ツ田小学校に来てくださりありがとうございました。先生がおっしゃった「から」をやぶるということを生かせるよう生きていきたいです。
- ・すごくこんなたのしいじゅぎょうはありません。またやってみたいです。
- ・また楽しいじゅぎょうをやりたい。たのしかったです。
- ・優しくおしえてくれて、とても分かりやすくて楽しかったです。ありがとうございました。
- ・今までにない授業ですごく楽しかったです。ありがとうございました。
- ・すばらしいけいけんができてよかったです。工夫するということをし、手を動かすということをし、楽しかったです。
- ・図工のおもしろさや、木でたくさんものがつくれるおもしろさがわかりました。
- ・どうしてちょうこくにきょうみをもったのか?
- ・プロムナード以外にどんな仕事をしていますか?
- ・他にも枝やモールや家にあるもので作れる物ってなんですか。いつもなら作っているものも使えうなので教えてください。



中学校では、「知立の鬼」をテーマに、三州瓦で有名な高浜市の粘土を使用して、自らが考える鬼のイメージを焼き物にしました。授業に参加した生徒は、普段の授業では取り扱う機会が少ない素材での造形活動に、新鮮な気持ちで取り組んでいました。

中学校美術部 陶彫作品展
会場 | 緑のパティオ付近

【講師 コメント】

中学校では、イメージに合わせ、粘土の形・位置・寸法・方向を工夫する力を培うことをねらった。禍々しい表情の鬼、ほっこりと癒される鬼など、想いと形を響き合わせるために、造形に熱中する生徒らが印象的だった。



永江智尚先生



【展示の様子】

■出前授業の感想(アンケートより)

- ・焼き物を自分で作るきかいはなかなかないので、きょうな体験になりました。とても楽しかったです。
- ・焼き物をつくってみて、ねん土の形をおもしろい変えたりして楽しかったです。移動は大変でしたが、またやってみたくて思いました。
- ・作っている時分からないことがあった時よくおしえてもらえてすごく楽しくできました。いろんな作品を見てとても楽しかったです(いろんな中学校の)。
- ・意外と作るのが難しくどうしようと思ったこともあったけど、先生などにアドバイスをもらい最後まで作ることができたのでよかったです。
- ・最初は、何も分からなかったけど、作業を進めていくうちに慣れてきたと同時に、デザインや、良い点、直した方がいい点の意見をもらうことができて、とてもさんこうになりました。
- ・アイデアスケッチを参考にしながら自分だけの知立の鬼を制作するのは最初は難しそうだな…と思っていましたが、やっていくうちに時間を忘れるほどに夢中に制作をしてとても楽しかったです。
- ・なかなかできないことなので楽しかった。うまくいかなかったけどおもしろかった。
- ・ツノ作ってない。わすれてたびえん
- ・ねん土で何か作れることはあまりないので作れて楽しかったです。
- ・むずかしくて、つまんないのかなって思った。でも、めっちゃ楽しかった。
- ・講師の方たちが気さくに話しかけてくれたので、楽しく気軽に話すことができてよかったです。めっちゃ楽しかったです!!またやりたい! たのしかった!!またやりたい!!
- ・ねん土をつくるのは、とても大変だったけど、つくっていくにつれて少しずつ作品をつくる大変さを知ったうえで楽しさもでてる。
- ・困っていたらアドバイスをしてくれたおかげで、思っていたとおりの物が、作ることができたので、よかったなと思いました。
- ・自由に作品を作ることができたので、思いのままに粘土をこねたり、形を作ったりできた。
- ・むずかしかつたけど、コツをつかめばたのしかった。
- ・あまり粘土をつかった作品をつくる機会が少ないので、きょうな体験になったと思います。教えてくださった人も、ていねいに教えてくれたので自分のスキルアップの機会になりました。
- ・思うがままの鬼が作れてよかったです!
- ・あまり焼き物について詳しくなく、経験事だったので面白かったです。
- ・他の学校の人と会えて少々仲良くなったので良かったです。
- ・美大の方が、道具の使い方を教えてくれたので、スムーズに形をつくることができました。
- ・土粘土の感触が好きだった。やってみると意外とハマって、集中して取り組んだ。また機会があれば参加したいです。
- ・とても楽しかったです!先生がたが優しくかったです!むずかしくて困っていたらアドバイスをくださりとても嬉しかったです!またきかいがあれば参加したいです!
- ・楽しかった。とにかく楽しかった。今回時間が少なかったから最後思うがままに作れずあせってしまっただけ全体的に見て、とても楽しいなと思いました。
- ・教えてくれた人(女の人)がたたくさんアドバイスをしてくれてやさしかったし、かわいかったです。
- ・教えてくれたお姉さんがやさしくてかわいかったです。
- ・今回初めてこういう作品に挑戦しましたが、ていねいに教えていただき楽しく作ることができました。他の中学校の子とも仲よくなれてうれしかったです。

■その他の意見や感想(アンケートより)

- ・今回は「知立の鬼」というテーマだったけど、違うのも作ってみたいと思いました。
- ・初めて鬼を作ってみて、粘土で作品をつくることは、とても難しく、楽しいことだと改めて思いました。
- ・またこのような出前授業をやってほしいです…!!
- ・楽しくて、イメージがたたくさん広がった。
- ・話しかけやすい方が講師だともっと楽しくなると思います。
- ・図書館周辺にある野外彫刻は、宇宙から降ってきたものかと思ったからビックリ!!
- ・焼き物以外にもいろいろな芸術にふれたり、作ってみたいする機会をもっとつくってもらえたらうれしいです。
- ・粘土を形にするのはちょっと難しかったけど、楽しかったです。
- ・大満足!
- ・もっと時間を長くしてほしいと思いました。
- ・本格的に大きな粘土を使った作品をつくるのは初めてだったので楽しかったです。



寺嶋賢志先生

【知立中学校 寺嶋賢志先生 コメント】

中学校3校の美術部員で「知立の鬼」をテーマに立体作品に取り組みさせていただきました。夢中になって取り組む子供たちの姿を見て、土を扱う作品制作の魅力が改めて感じました。迫力ある鬼から、かわいらしい鬼まで各々が思い描く「知立の鬼」が表現されていました。

出前授業での子供たちへの技術指導や授業実施後の作品の焼成・運搬・展示といった様々な過程でのみなさんのご協力に感謝します。



知立の鬼

野外彫刻プロムナード20周年記念事業「出前授業」記録
中学校美術部 陶彫作品展

講師：永江 智尚氏(愛知教育大学 美術教育講座 准教授)
対象：知立・知立南・竜北中学校 美術部 (34名)
日時：令和2年12月5日(土) 12:30～16:00
場所：知立中学校 美術室

制作工程

1 知立の鬼をイメージし、アイデアスケッチを作成する(事前準備)

2 板状の粘土2枚のうち、1枚を曲げて、もう1枚に重ねる。



3 1のアイデアスケッチをもとに、目や口をあけたり、角や飾りをつけたりする。



4 完成!



フォトコンテスト

募集期間 | 2020年4月16日[木]～12月28日[月]
 対象 | 知立市内に展示されている野外彫刻作品
 応募総数 | 278作品

(一般の部:187作品、中学生以下の部:91作品)

知立市内に設置されている野外彫刻をテーマにフォトコンテストを実施しました。風景にとけこんだ野外彫刻やご家族と一緒に撮影された作品など、数多くの素晴らしい作品が集まりました。

受賞作品をはじめとする全ての応募写真は記念展の会期中、パティオ池鯉鮒内のからくり展示ロビーにて展示し、来場者の皆さまにも「彫刻のある風景」の魅力を感じていただくことができました。



受賞作品

野外彫刻プロムナード展振興運営委員会委員長賞



一般の部 撮影者:あさか
 彫刻作品:GIRLS' WAR～カ・イ・カ・ン カテゴリーズ～ ver.人間ピラミッド(野外彫刻プロムナード展2020)



中学生以下の部 撮影者:いつき
 彫刻作品:ハジマリノカタチ(丁風公園)

知立ライオンズクラブ会長賞



一般の部 撮影者:fuji
 彫刻作品:日常～慈～廿一 (パティオ池鯉鮒内)



中学生以下の部 撮影者:スティープ
 彫刻作品:生命 (野外彫刻プロムナード展2020)

知立市長賞



一般の部 撮影者:ミッシェル
 彫刻作品:童～空想と思案～(公園通線)



中学生以下の部 撮影者:すずちゃん
 彫刻作品:GIRLS' WAR～カ・イ・カ・ン カテゴリーズ～ ver.人間ピラミッド(野外彫刻プロムナード展2020)

パティオ池鯉鮒賞



一般の部 撮影者:ゆきちゃん
 彫刻作品:Nihil(野外彫刻プロムナード展2019)



中学生以下の部 撮影者:こーくん
 彫刻作品:在る人(野外彫刻プロムナード展2019)

知立市文化協会賞



一般の部 撮影者:小伊豆 忠
 彫刻作品:自由と平和の像 (パティオ池鯉鮒内)



中学生以下の部 撮影者:ひーちゃん
 彫刻作品:自主休講(野外彫刻プロムナード展2020)

入賞

一般の部



撮影者:フォト女子
彫刻作品:風の門(新地公園)



撮影者:野々山 恭平
彫刻作品:躍動(スギ薬局知立福祉アリーナ)



撮影者:かにぼん
彫刻作品:芽吹く(第10回野外彫刻プロムナード展)



撮影者:孫大好きいじ
彫刻作品:ほほえむ人(公園通縁)



撮影者:福沢 柳輔
彫刻作品:かきつばた姫(東海道松並木沿い遊歩道)

中学生以下の部



撮影者:Sosuke Kamishima
彫刻作品:Form 0605(野外彫刻プロムナード展2020)



撮影者:花井 弥結
彫刻作品:ハジマリノカタチ(丁風公園)



撮影者:神谷 紅羽
彫刻作品:GIRLS' WAR~カ・イ・カ・ン カテゴライズ~
ver.人間ピラミッド(野外彫刻プロムナード展2020)



撮影者:荒木 奈々子
彫刻作品:ハッケヨイ(公園通縁)



撮影者:まさ
彫刻作品:かきつばた姫(東海道松並木沿い遊歩道)

展示風景

作品と風景を写した写真や、作品と人物を写した写真など、撮影者ひとりひとりの視点で撮られた写真からは、彫刻作品の新たな魅力を再発見することができました。来場者の皆様にも、新たな写真の魅力を楽しんでいただけました。



一般の部 応募作品



撮影者:天候のラッパ



撮影者:ごうこん



撮影者:孫大好きいじ



撮影者:孫大好きいじ



撮影者:孫大好きいじ



撮影者:孫大好きいじ



撮影者:じゅんびよ



撮影者:じゅんびよ



撮影者:孫大好きいじ



撮影者:孫大好きいじ



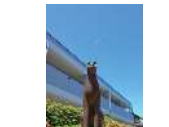
撮影者:孫大好きいじ



撮影者:フォト女子



撮影者:フォト女子



撮影者:フォト女子



撮影者:ごうこん



撮影者:ごうこん



撮影者:ごうこん



撮影者:ごうこん



撮影者:ごうくん



撮影者:丸坪憲



撮影者:ごうくん



撮影者:ごうくん



撮影者:ごうくん



撮影者:坂田武



撮影者:坂田武



撮影者:坂田武



撮影者:坂田武



撮影者:坂田武



撮影者:ごうくん



撮影者:ごうくん



撮影者:フォト女子



撮影者:フォト女子



撮影者:フォト女子



撮影者:坂田武



撮影者:しょうちゃん



撮影者:しょうちゃん



撮影者:しょうちゃん



撮影者:しょうちゃん



撮影者:フォト女子



撮影者:フォト女子



撮影者:丸坪憲



撮影者:丸坪憲



撮影者:ヤングシニア



撮影者:しょうちゃん



撮影者:しょうちゃん



撮影者:しょうちゃん



撮影者:よっちゃん



撮影者:よっちゃん



撮影者:ヤングシニア



撮影者:ヤングシニア



撮影者:ヤングシニア



撮影者:ヤングシニア



撮影者:ヤングシニア



撮影者:よっちゃん



撮影者:よっちゃん



撮影者:よっちゃん



撮影者:野々山彰平



撮影者:よっちゃん



撮影者:カピゴン



撮影者:カピゴン



撮影者:白石えいぞう



撮影者:宇佐見首可



撮影者:あっくん



撮影者:よっちゃん



撮影者:よっちゃん



撮影者:よっちゃん



撮影者:片雲



撮影者:コーヒーおじさん



撮影者:あっくん



撮影者:あっくん



撮影者:あっくん



撮影者:あっくん



撮影者:あっくん



撮影者:コーヒーおじさん



撮影者:コーヒーおじさん



撮影者:コーヒーおじさん



撮影者:コーヒーおじさん



撮影者:コーヒーおじさん



撮影者:杉山雅



撮影者:杉山雅



撮影者:杉山雅



撮影者:片雲



撮影者:井野稔



撮影者:コーヒーおじさん



撮影者:ヒロチユン



撮影者:ヒロチユン



撮影者:ゆきちゃん



撮影者:よっちゃん



撮影者:井野稔



撮影者:坂田武



撮影者:坂田武



撮影者:坂田武



撮影者:坂田武



撮影者:よっちゃん



撮影者:ミッシー



撮影者:ミッシー



撮影者:Koichi



撮影者:Koichi



撮影者:Ki-tchi



撮影者:ヒロシです



撮影者:ヒロシです



撮影者:ヒロシです



撮影者:ヒロシです



撮影者:ヒロシです



撮影者:ヒロシです



撮影者:ヒロシです



撮影者:ヒロシです



撮影者:るっち



撮影者:るっち



撮影者:るっち



撮影者:るっち



撮影者:るっち



撮影者:るっち



撮影者:カツカレー



撮影者:カツカレー



撮影者:カツカレー



撮影者:カツカレー



撮影者:カツカレー



撮影者:カツカレー



撮影者:カツカレー



撮影者:カツカレー



撮影者:ベロン&ぎんた



撮影者:osanori



撮影者:osanori



撮影者:osanori



撮影者:キヨ



撮影者:キヨ



撮影者:キヨ



撮影者:キヨ



撮影者:小伊豆忠



撮影者:小伊豆忠



撮影者:小伊豆忠



撮影者:小伊豆忠



撮影者:小伊豆忠



撮影者:小伊豆忠



撮影者:小伊豆忠



撮影者:まろすけ



撮影者:まろすけ



撮影者:まろすけ



撮影者:ぼたぼた



撮影者:ぼたぼた



撮影者:あきカメ



撮影者:あきカメ



撮影者:あきカメ



撮影者:あきカメ



撮影者:あきカメ



撮影者:あきカメ



撮影者:あきカメ



撮影者:小伊豆忠



撮影者:小伊豆忠



撮影者:ベロン&ぎんた



撮影者:ベロン&ぎんた



撮影者:ひーちゃん



撮影者:ひーちゃん



撮影者:ひーちゃん



撮影者:ひーちゃん



撮影者:ひーちゃん



撮影者:ひーちゃん



撮影者:かにぼん



撮影者:かにぼん



撮影者:かにぼん



撮影者:かにぼん



撮影者:かにぼん



撮影者:かにぼん



撮影者:かにぼん



撮影者:かにぼん



撮影者:かにぼん



撮影者:フリージア



撮影者:フリージア



撮影者:フリージア



撮影者:フリージア



撮影者:フリージア



撮影者:フリージア



撮影者:フリージア



撮影者:フリージア



撮影者:フリージア

*各作品は応募順に掲載しています。お一人で応募数が10点を超えている場合は調整しています。

中学生以下の部
応募作品



撮影者:TJ



撮影者:TJ



撮影者:TJ



撮影者:あつくん



撮影者:ひーちゃん



撮影者:ひーちゃん



撮影者:ひーちゃん



撮影者:ひーちゃん



撮影者:すずちゃん



撮影者:すずちゃん



撮影者:すずちゃん



撮影者:すずちゃん



撮影者:すずちゃん



撮影者:すずちゃん



撮影者:Sosuke Kamishima



撮影者:Sosuke Kamishima



撮影者:Sosuke Kamishima



撮影者:Sosuke Kamishima



撮影者:ひーちゃん



撮影者:ひーちゃん



撮影者:ひーちゃん



撮影者:ひーちゃん



撮影者:ひーちゃん



撮影者:Sosuke Kamishima



撮影者:Sosuke Kamishima



撮影者:Sosuke Kamishima



撮影者:Sosuke Kamishima



撮影者:Sosuke Kamishima



撮影者:荒木菜々子



撮影者:荒木菜々子



撮影者:荒木菜々子



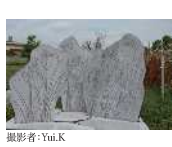
撮影者:荒木菜々子



撮影者:荒木菜々子



撮影者:Yui.K



撮影者:Yui.K



撮影者:Yui.K



撮影者:Yui.K



撮影者:Yui.K



撮影者:石原未桜



撮影者:石原未桜



撮影者:鷺見達里



撮影者:鷺見達里



撮影者:鷺見達里



撮影者:Yui.K



撮影者:Yui.K



撮影者:いつき



撮影者:いつき



撮影者:まさ



撮影者:鷺見達里



撮影者:鷺見達里



撮影者:神谷紅羽



撮影者:神谷紅羽



撮影者:永井優風



撮影者:まさ



撮影者:まさ



撮影者:まさ



撮影者:こーくん



撮影者:こーくん



撮影者:永井優風



撮影者:永井優風



撮影者:花井弥結



撮影者:花井弥結



撮影者:花井弥結



撮影者:こーくん



撮影者:こーくん



撮影者:こーくん



撮影者:こーくん



撮影者:みいっぴー



撮影者:クリスティース



撮影者:クリスティース



撮影者:クリスティース



撮影者:クリスティース



撮影者:クリスティース

*各作品は応募順に掲載しています。
お一人で応募数が10点を超えて
いる場合は調整しています。

日時 | 2021年2月11日[木・祝] 13:00-14:00
会場 | 花しょうぶホール

野外彫刻プロムナード20周年記念展の開催を記念して、セレモニーを開催し多くの皆さまにご来場いただきました。

セレモニーでは、来賓のご祝辞のほか、野外彫刻プロムナード事業の20年のあゆみや20周年記念事業の紹介などの活動報告、フォトコンテスト表彰式を行いました。



受付の様子

あいさつ



森島秀博 野外彫刻プロムナード展振興運営委員会委員長 あいさつ



大村秀章 愛知県知事 ご祝辞



神谷潤 知立ライオンズクラブ会長 あいさつ



林郁夫 知立市長 あいさつ

ご来賓のみなさま

愛知県知事	大村 秀章 様
愛知県議会議員	柴田 高伸 様
衆議院議員	大西 健介 様
知立市議会議員	永田 起也 様
知立市商工会 会長	新美 文二 様
知立ロータリークラブ 会長	野々山 和彦 様



客席の様子

野外彫刻プロムナード事業 活動報告



プロムナード事業の紹介



司会による活動報告

永江氏による出前授業の講評



フォトコンテスト 表彰式



野村義弘氏によるフォトコンテストの講評



野外彫刻プロムナード展振興運営委員会委員長賞 表彰



知立ライオンズクラブ会長賞 表彰



知立市長賞 表彰



パティオ池鯉鮒賞 表彰



知立市文化協会賞 表彰

日時 | 2021年2月11日[木・祝] 14:00-16:00
 会場 | 花しょうぶホール
 出演 | 第1部：加藤真也、加藤真浩、永江智尚
 第2部：江村和彦、小島雅生、原歩
 第3部：加藤マンヤ、篠田美有
 司会 | 山本辰典

記念展に出品された作家の中から、作品制作や芸術にかける思いを語っていただきました。第1部『彫刻について』、第2部『素材について』、第3部『芸術と社会について』をテーマに、制作の様子や作品の画像をもとに、彫刻をつくりはじめたきっかけや、様々な素材技法表現についてや、社会との繋がりなどを語っていただきました。来場者の皆さまにも芸術に対し関心を持ってもらうことや、まちなかに彫刻やアートがあることの意味について、考えていただくことができました。



第1部「彫刻について」



左から司会の山本辰典氏、加藤真也氏、永江智尚氏、加藤真浩氏



第2部「素材について」



左から江村和彦氏、原歩氏、小島雅生氏



第3部「芸術と社会について」



左から篠田美有氏(リモート出演)、加藤マンヤ氏



第1部：加藤真也、加藤真浩、永江智尚 司会：山本辰典 [3]

山本辰典(以下:司会)
 皆様、こんにちは。全くお客さんがいないのかなと思って準備していたのですが、意外と会場に来て下さっています。ありがとうございます。インスタライブの方々も聞こえていますか、見れていますか? 登壇者の方達も随時ライブを見ながらトークを進めていただけるようです。
 プロムナード記念展を20周年まで続けてくる中で、5周年の際は愛教大出身者の片岡真実さん[1]、10周年の際は北川フラムさん[2]をお呼びし、専門家の方々に基調講演をしていただく機会を設けてきました。今回、この展覧会を準備していく中(新型コロナの関係)で今日を迎えられるかどうか分からない状態で本日まで来ました。そんなこともあり、20周年を迎えた今回、一度作家の人たちの生の声や作家の人となりや市民の皆様へ伝えられたらと思う、このトークイベントを企画しました。



[1] [2]

登壇者の方達は本展覧会の出品者の方々です[3]。右側バスケットボール選手の人体彫刻をつくられた加藤真浩さん、左側の人体彫刻をつくられた愛教大の永江先生、真ん中の磨き石、石彫の加藤さんです。事前打ち合わせをしておいたのですが、加藤くん(加藤真浩)と加藤さん(加藤真也)でよろしいですか?本展覧会、「加藤さん」がたくさんいらっしゃいます。この後の第3部にも加藤さんがもう1人出てこられますのでよろしく願っています。
 3名の方にご登壇していただいた理由ですが、主に「彫刻」という領域で制作を続けていらっしゃるの、そのことから今回彫刻にまつわる色々なこととお話していただきたいと思ひます。色々と言っても20分しか時間がないので、全然伝えられないかもしれませんが皆様お付き合いください。それでは彫刻についてお話を聞いていきたいと思ひますが、まずは「なんで彫刻をやろうと思ったか?」です。絵画や工芸など美術の領域には様々なジャンルがありますが、なぜ彫刻制作を選んだのでしょうか?一番若い加藤くんからお願いします。

加藤真浩(以下、加藤ま)
 彫刻のきっかけですが、元々小さい頃から何かを作ることだったり、絵を描くことだったり好きだったんですけど、直接的なきっかけは、高校生の時の美術の授業でフィギュアを作ったことです。その時は北斗の拳のキャラクターのフィギュアを作ったんですけど、全くゼロのところから作ることが僕にとっては面白くて、今も彫刻やものづくりを続けています。
 司会 彫刻だけじゃなくて、美術に進もうかなと思ったところまで膨らませるとどうですか?
 加藤ま 僕は中学は水泳、高校は水球をやっていた、美術とは一切関係のない高校生活を送っていたんですけど、いざ進路を考えて「何しよう?」ってなった時に、僕の恩師の高校の美術の先生が僕のことを初めの授業の時に美大に行くと思っていらしたくて…。

司会 それは(加藤くんが美大に行くであろう)理由があったんですか?
 加藤ま いや、先生に後から聞いたら「そんなこと言っちゃった?」と言われたので分らないんですけど、その話から初めて美大っていう選択肢があるんだって気づいたんですけど、それが2年の終わりの頃です。ただ

そこで美大に進むための色々なことを始めた訳じゃなくて、3年生の夏までは部活の大会があったから、それが終わってからデッサンを毎日やって、粘土で制作をしたりして、そこから彫刻の勉強をどんどんしてきました。

司会 大学に入る前に彫刻に進もうと決めていた訳ですね?
 加藤ま そうですね。絵よりは単純に立体をつくるのが好きだったので。
 司会 ありがとうございます。それでは永江先生、きっかけをお願いします。

永江智尚(以下:永江)
 中学生の時、最初に美術をやるか、将来何になろうか色々考えた時に、医者もいいな、弁護士もいいな、政治家もいいなみたいに色々考えていたんですけど、人生1回しかなくて一番面白いのはなんだろうなと思ったら、美術が一番面白そうだなと思ったので、高校で美術をやるぞと思って高校に入ったんですよ。その時は、油(絵画)をやりたいと思っていたんですけど、学校にいらした美術の先生が彫刻の先生で「彫刻やってみなか!」と誘うので、「えー、油やりたい」と思いながらも、「記念になるし!」って言われ、爺さんをモデルにした彫刻を作ってみると、次は「もっと大きい彫刻を作ろう」と指導されて、「えー、嫌だ油やりたい」と思ってたんですけど、ずるずる彫刻を作っていたんですよ。これって結構彫刻が続いている人の多いが、作ってみたら面白かったということが多いと思うんですね。それで他人へダイレクトに塊や存在で訴えかける(彫刻の)魅力が面白いなと引き込まれてしまったのがうだなと思ひます。

司会 高校時代、何だかよく分らないけど導かれたら彫刻の制作をしていく上で、大学でも彫刻を専攻していくと思って大学に進んだんですか?

永江 そうですね。
 司会 (加藤さんに向けて)緊張していますか?

加藤真也(以下、加藤し)
 緊張しています。喋るのが苦手なので…。
 司会 肩でも揉ましましょうか?

加藤し 大丈夫です(笑)。あんまり言うのが恥ずかしいんですけど、大学の頃に付き合ってた彼女がめちゃくちゃ絵が上手くて…。

司会 そういのが聞きたいんですよ!
 加藤し それに刺激を受けて絵を描こうとやってみるんですけど、どうしても彼女に敵わなかったんだけど、授業で立体をつくる課題があった時に、彫刻は高校時代から周りのみんなもやってこなくて、絵を描くことばかりやってきた人たちで、逆に自分は大学に入学してから美術を始めたので、スタートラインが彫刻はみんなと一緒に、やってみたら他の人より自分の得意なんじゃないかと思ひました。その時に周りを見渡してみたら自分が彫刻向きだと気づいて、もちろん彼女よりも僕の作品のが輝いていたので、これなら勝てると思って。

司会 彼女と作品を比較したってことですか?
 加藤し 彼女の作品と自分の作品を比較する話です(笑)。授業の講評なんかで作品を並んだ時に彼女の絵と自分の絵ではいつも負けていたので、彫刻課題の時は自分の作品が別格に良かったので、向いてるんだなと思って彫刻を選択しました。

司会 結果的にはその彼女は?
 加藤し 今の嫁さんです。

会場 おおお(拍手)!

司会 今日会場に来られていますか?
 加藤し 全然来ていません(笑)。

司会 ということで、それぞれのきっかけをありがとうございます。高校から(彫刻を)選んだ方、高校から大学に進学する際に彫刻を選んだ方、大学に入ってから彫刻を選んだ方とそれぞれ彫刻を選ぶタイミングは違った3名ですが、結果的にはそれ以後ずっと彫刻制作を続けている訳です。同じ「彫刻」の領域で制作を行っていますか、それぞれのスタイル(作り方、素材)が違います。加藤くんら人

体を扱った塑像、永江先生も人体を扱った塑像、加藤さんと石彫ということでそれぞれ「なぜそのスタイルなのか？」を加藤さんから聞きたいと思います。

加藤 僕は塑像をやっているんですけど、「塑像」と言っても分かりますか？

司会 粘土を使って作品をつくる？

加藤 粘土で作品を作っています。今写っている作品【3】も粘土で作っているんですが…。これ【4】が作り始めのところですが、ここから段々完成…。段々顔を作り込んだり【5】、胴体を少し変えていたりしています【6】。僕は粘土の魅力としては、どれだけでも自分で追っかけていけるというのが一つの魅力だと思っています。終わりが無い。答えがない。答えがない訳じゃないけど、ずっとやれるところが魅力的でずっとやっています。



司会 はい、ありがとうございます。そうしましたら、永江先生お願いします。

永江 自分も加藤さんと一緒に、粘土ってどこまででもできるの、執念深くずっと、もうちょっと足したいとか引きたいとかを最後までネチネチ、ネチネチやるのに非常に向いている点も自分も一緒です。最後呪いをかけるんじゃないかっていうぐらい最後までずっと続けられるのが一点で、あとは(粘土を)伸ばしたり置いたりするとグッと力を込めているように見たり、スwootと裏やかに見せたりすることが、かたちと一緒に楽しめるという色々々なことを試行錯誤することができるところが非常に魅力的です。



今回の展覧会には漆の作品【7】も出していますが、そういう時には素材も大事にしたがります。多くはかたち自身がどういうかたよのかに重きを置いて粘土をやっています。あとは加藤くんや自分とはアカデミックな仕事と言われるような古典的な彫刻を作っているのですが、今ある彫刻のフィールドの中でより深く掘っていくような領域だと思っています。対して現代的な仕事、今回のプロムナード展にも色々ありますが、そういう現代的な仕事は彫刻という領域をどんだけ掘っていくタイプの仕事かなと思っています。自分の場合は先人とかを感じたい気持ちが強かったのでより深くという風な仕事に目が向いてつづいています。

司会 塑像をやっているお二人は相容れる所と相容れない所とかがあったりするんですか？(加藤くんは)永江先生のこと言ってるところは分かるけど、この部分は分からないとかありますか？

加藤 今おっしゃっていた「深く追求する」「過去の先人たちの…」というところは僕も思っていて、例えばロダンとか昔の彫刻家の作品が今でも凄い作品とずっと言われ続けているところだったり、そこで考える人体をやり続ける事で何か見えてくるものがあるのかっていう。時代が経っても未だに多くの人が見たことがないものはいくつもあるのかな…。何かは分からないけどそれを深く探っていると思って、僕は人体をやっています。

司会 永江先生、補足があれば。

永江 だいぶ似ているタイプなのかなとは思っていて、自分は出来ればもっとフィギュア的な仕事をやりたい気持ちもあるんですけど…。

司会 そうなんですか？!

永江 そうなんです(笑)。もっともっと面白い仕事をやりたいなと思っているもの、歳もそれなりにとってきたし、もう少し腕を据えた仕事をしたいなと聞き合っているところですが、でもこの10年の間では、もっと幅を広げたいなという想いがあるので、加藤くんの仕事とかは非常に刺激になっています。

加藤 ありがとうございます。

司会 加藤さんと事前に打ち合わせをしている時には、その辺のスタイルなんかは迷いがあると言っていたけど、永江先生にもちょっと迷いがあったりと言うのは似ているけど、迷いなんかも似ていないですか?… ヌメだ!!これ朝になっちゃうからやめしよう(笑)。加藤さんに移ります。石彫のスタイルについて。

加藤 大学の頃は「石彫大変そうだなー」と思っていてあまりやっていなかったです。卒業制作で1つ作ったけど卒業してしまいました。卒業してから3年目ぐらいに先輩が「石彫の集い」というシンポジウムに誘って来て、10人のプロ作家と10人のアマ作家が2週間一緒に寝泊まりして、蛭川という石の産地で、クズ石(石を切り出したときの端材)から作品を作り上げた。ここ5~6回参加してきました。それから本気で石彫をやりたいなと思ったのがきっかけです。

例えば、絵画なんかだと色の組み合わせが無制限なんです。粘土だと付たり取ったり終わりが分からないから、そこが好きな2人(永江先生、加藤くん)と、終わりが自分だと分からないから、自分で作品の完成ができない。絵もそうだし、塑像もそうなんです。自分は終われないというのがあるので、自分は石とか木とかに向き合って、もうこれ以上自分の技術の限界だっているところが自分の今の終わり方です。次はそれを越えたい。もっと技術的にもうがりたいし、表現もできようになりたいたいという形で進めています。その方が相性が良い。一発勝負の闘いみたいな方が良い。

司会 元々ある材料から削っていく加藤さんと、かたや付けてつくっていくという違いがあって、専門的な言い方をすると、モデリングとカービングと言って、付けていくことと削っていくことは逆の行為だから、その辺が終わる方も違いますが、加藤さんの話の中で「野外シンポジウム」のことに触れていましたが、ちょっと突飛的な話になってしましますが野外彫刻の役割なんかを作家自身の捉え方で話していただけたら。加藤さんから。

加藤 自分は石彫なので、石の彫刻が凄気になるんですが、野外彫刻はバティオのプロムナードでも出させていただいたこともあったんですが…。やばい、真っ白…。

司会 例えば、日本中の野外彫刻でこういう作品が社会的役割を果たしているという、自分の中で感じるような作品が具体的にあれば教えてください。

加藤 人と触れ合えるような石の彫刻がすごく良いなと思ってまして、例えば札幌に「ブラック・スライム・マトリクス」というイサム・ノグチの滑り台の作品があるんです。それは札幌駅から出てくる街中にあるんですけど、子どもが遊べるようになってるんです。車はそこをスピードを出さずに避けて通っていかないと行けないというのがあったり、六本木にある安田侃の「意心帰(いんき)」、白木大理石の作品があるんですが、それは真ん中に穴が空いていて、親子がショッピングに来た時に子どもがその中に入って遊べるような、かたちも良いですし、街と人と関係を作る野外彫刻、街に影響を与えていくような作品なんかは凄いなと思っています。

司会 ありがとうございます。永江先生お願いします。

永江 今おっしゃった「意心帰」のやつだと大理石で、でっかい穴の中に入れて、実際入ってみると面白いんですよね。私も何度かスーツ姿のおじさんがその中に入るのを、その周りを若者が歩いていたりする中で見ました。(その光景が)非常に安くて面白いから、やっぱり彫刻と直接的に関わり合えるというのが野外彫刻の一つの魅力だなと、あとはその場所自体に、意味性を付けていく役割があると思っています。例えば、自由の女神とかっていうのもニューヨークが自由だっていうだけじゃなくて、自由の女神があることで自由度が上がった、あとはバチ公像とかもそれがあることで、あそこ前で待ち合わせをしようとしてそれぞれの行動が変わっていくというの、やっぱり彫刻があるから。みんなの動きが変わって、想いも変わっていくことも一つの魅力だと思います。

司会 ありがとうございます。僕とか加藤くんの世代だとアトリエで作っている時に屋外に作品を置かなきゃいけないってことを意識していなかったんですが、加藤さんと事前に話している時にあまびんときてなかったけど、プロムナードは1回、屋外へ作品を出しているけど、あの時はどんなことを思った？

加藤 単純に嬉しかったですよ(笑)。

司会 それはなんですか？

加藤 彫刻って僕の中のイメージでは、外に置かれているものだったので、美術館とかに行かなくても、どこかの公園とかに彫刻があった

りだとか、一番誰でも見にいけるようなところに自分の作品が置いてもらえたというのがすごく嬉しくて、なんか彫刻をやってきて一つのゴール、とは言い過ぎかもしれないけど、一つの着地点ではあるのかなと思っていて、この作品とかも今実際に名古屋芸大の近くにずっと置かせてもらっているんですけど、色んな人に見てもらえるというのが嬉しいです。

司会 これ【8】大きいんですね？

加藤 2mぐらいあります。ボクサーの作品なんですけど、(置いてあるところが)福祉施設みたいなところで、「頑張らましよう」みたいな意味合いで置きます」と言われて、施設の担当の人にこういうのもいいんだな、自分の中でこういうイメージしたものが、誰かに僕がイメージしてつくった意図はなかったんですけど、設置されているというのは嬉しいなと思います。



司会 ありがとうございます。写真で見るとイメージより遥かに大きい作品だったり、石を削るなんて大変な作業ですって、彫刻制作には本当に苦労が沢山あります。本来はそういうところで深掘りできたらもっと面白いです、時間もあって、最後にそれぞれの思う「彫刻とは?」ということについて、自分が思「彫刻とは?」について話していただきたいと思っています。加藤さんから。

加藤 すごく難しいですね。朝の打ち合わせからずっと考えていたんですけど、さっきの塑像の「なんで塑像を選んでいるんですか?」と一緒に、自分にとって彫刻っていうのが終わりが無いもの。漠然としています。

司会 作っている上でですか？

加藤 そうですし、自分の中で彫刻というものはそういう仕事で、どこまでも勉強できる。死ぬまでずっと終わらずに勉強していきたくらうなという風な気がします。全然一言じゃなくすいません。

司会 一言じゃなくいいですよ(笑)。永江先生お願いします。

永江 (加藤くんの意見)綺麗ですね。さっき言ったようにすぐのめり込む世界だと思んですけど、のめり込む、場所を用意して道具も用意して、色々していきと抜け出せなくなるので…。

司会 自分で首を絞めていくんですか？

永江 どんどん、どんどん辞めるためには指を摘まなきゃいけないんじゃないかと思うぐらい、自分にとっては呪いのようになってきていて、でも呪いだからこそ辞めずに続けられて、よりもっと面白いものを出してみたいという思いで繋ぎ合っているような気がします。

司会 ありがとうございます。それでは加藤さん。

加藤 今の話を聞いて共感というか、アトリエを作ったんですけど、スランプの時に(アトリエを)使えないんですよ。作りたいものがなくて、家で遊んでいると嫁に凄くプレッシャーをかけられて、苦しいんですよ…。

司会 それほどぐらいの期間空いたらうんですか？

加藤 最長だと1年ぐらい、手がつかない時がありました。「彫刻とは?」で定義として彫刻を知りたくてすごく勉強したんですけど、すればするほど霞んでいくという。全然分からなくなっていくので、何なんだろうとなるので、彫刻とは何かとここでは言えないんですけど、自分にとっての彫刻とは何かを制作しながら見つけていこうとしているというのが、自分にとっての「彫刻」です。

司会 ありがとうございます。カッコいいです。事前に打ち合わせた時に加藤さんが「言葉で伝えられないから石彫をやったんだよ」とおっしゃっていて、正にそうというか、今回の展覧会に参加して下さる多くの方があまり普段喋らなかつたにして、加藤さんとも舞台上上がったもののに「すいません」って頭下げて上つてもらいました。本来まだまだ掘り下げなければいけない部分が多くありますが、ここまでが「彫刻について」ということで3名の方ありがとうございます。続きまして、第2部「素材について」ということで別の3名の作家さんに少し踏み込んでお話を聞きたいと思っています。



第2部：江村和彦、小島雅生、原歩 司会：山本辰典 【1】

山本辰典(以下:司会) 第2部「素材について」を始めさせていただきますので作家さんの紹介をさせていただきます【1】。右の女の子が組体操をしている作品の原歩さんです。真ん中の恐竜の江村和彦さんです。左の作品の小島雅生さんです。3名を呼んだ理由ですが、大学の頃から同じ素材や技法を扱いつながら今に至るまで、作品の制作を続けていらしゃるので、その辺のお話を聞かせていただきたいと思ってあります。1部の際に粘土から作品づくりをする作家さんがいらしゃりましたが、2部の方々も作り始めは粘土だったりで、そんなところから始めていきたいと思っています。それでは江村さんからよろしくお願いします。

江村和彦(以下:江村) 第1部では3名の方が彫刻についてということで、その内の2名の方が粘土は執念深く触れると話されました。そしてこの2部で呼ばれている3人は工芸から発達して今作品づくりをしているメンバーでして、僕は焼き物を作って今作品を出しました。昔から、今でもそうなんですけど、昔から食器を作っていてクロを回したり、粘土の塊からひねり出したりして、食器を作っていく中でこういう彫刻的なものを作っているように今も、その面白さになって作っているところです。

今回も展示会場に並んでいますが、僕はロボットと恐竜が好きなので、組み合わせで「ロボザウルス」なんて名前を付けてやっています。同じ粘土でも先ほどの加藤くんや永江さんもおっしゃって、テラコッタや彫塑用の粘土とは違っていて、いわゆる、焼き物になるもので作っています。先程終わりが無いくらい息詰める永江さんなんかはおっしゃっていましたが、焼き物にするために乾燥させるので終わりが逆にあります。乾燥させるけども作業のために乾燥させる過ぎないで行ったり来たりを繰り返しながら、一番良いかたちは何だろうかっていうのを探りながら作っています。

彫刻とちょっと違うと思うところは壺をつくるみたいに紐をくるくる【2】、いわゆる、土器を作ったりするようなたちで、ロクロも引くので尻尾の部分はロクロで引いて【3】、胴体部分ができたらお尻につけて尻尾として乾燥させて【4】、素焼きをします【5】。釉薬をかけて【6】こんな感じになります。このプロセスが一番楽しくて、



【5】 【6】 【7】

窯から出すまではちゃんと出来上がっているのかなという、出来上がって
るんだらうけど、でも開けてみるまでは分からないという、そこが
焼き物の一番楽しいところで、しかも焼き上がった後【7】、見る人
が「これって焼き物のな？」とか違う素材に見えるように釉薬を変え
たりすると、そういった表情が見えるところが、見るものに不思議な
感じを持ってもらえたいなと思ながらつくっているんで、同じ
（彫刻）立体を作るにしても1部の方々は少しアプローチが違うの
かなと。粘土の変っていく過程、色が変わっていく過程を楽しみな
がらやっけていのが僕の制作のスタイル。かたちになっています。

という感じで進んでいるっていいんですか？原さんに回しますよか？
僕は粘土を使っているんですが原さんは金属の作家さんなのでどう
やって作っているんですかね、あれは？

原 歩(以下:原)

私は今回は2つ出しています。
21回目のプロムナード展に
F.R.P.の作品【8】を出させてもら
っていて、樹脂の作品です。
茶室の方に同じかたちのもの
でブロンズのバージョンを出させ
てもらいました。



【8】

なんで金属かということですが、
金属の魅力とかさういって
は小島さんをお願いして、江村
先輩は「楽しい」というワードで
取り組まれていることだったので、
私は楽しいという感覚が
あまりなくて、どちらかというと「辛い」
感じです。辛いですが、その
辛さが自分にとっては必要だと思
っています。今回このことをお
話するというで自分の中でも金属
をやり過ぎているので、（普
段は）そこまで深く考えること
が少ないんですが、今回自分で
自分のことを知るとか、ワード
として自分の中で工芸とか、と
りわけ民藝が自分の中で重要
になってきます。金属を選んだ理
由は工芸にしがみついているとい
うか、そういう部分があると思
っていて、キーワードかなと思
いました。

すいません、私ばかり喋っていて…。
第4にも「今じ長くなるよ」と。

会場 ハハハハ(笑)

原 気をつけます。今回工芸に携わるきっかけ、
大学に入った時が一番大きいんですが、
私たち3人も同じ大学のコースでして、
5つの素材のどれかを最終的に選んで、
それを研究していくというコース
なんですけども…。

司会 ちなみに5つというのは？

原 金工、陶芸、ガラス、織り、漆です。
その中でも私は金属を選ん
でるんですけども、その前に大学
に入った時が、(高校時代に)全
然美術をやらずに入ってしまっ
て、美術に対する気後れがあっ
たので、それを埋めてくれるか
工芸であり、民藝という存在で
した。あとは、先輩たちが、江
村先輩だったり小島先輩が(愛
教大の造形文化コースの)1期
生の人たちが特に(制作の)環
境づくりに取り組まれている姿
を1年生の時からずっと見てた
ので、それが工芸とか民藝の精
神というかそういうものに繋
がるのを私は感じて、もち
ろん、先生たちがその前にはお
られないので、その影響が大
きいんですけども、1年生で入
った時の私たちがすると先輩
たちの取り組みが強く影響と
してあって、今でも先輩たちが
(制作)を続けてくれているので、
それが支えになって今でも続
けるという感じ。どこまで話
せばいいか分からないっちゃい
ました。

司会 まだ準備されていたんですかね？

原 まだあります(笑)。

山本 そしたら一旦、江村先生、陶芸を
選ばれたきっかけを言っていた
いて、原さんの金属を選ぶだけ
へ。

江村 原さんが言ってくださった通り、
5つの素材があって僕の頃はそ
の2つの素材を選んで、そこ
から1つを選ぶというかた
ちだったん

ですけど、まあ、肌合うという言葉が
一番適切かなと思っているん
ですけど、自分に一番しっくりきた
のが粘土だった。あとはその
時に食器を作っていたので、自分
が作ったものが使えるというこ
ろに魅力を感じたので。当時
はデザインをやりたくて大学に入
ったんですけど、デザインの仕
事をしていた叔父が「デザイナー
なんて一部分の上っ面なところ
でしか仕事をしないんだから、
ゼロから作れる焼き物って面白
いんじゃないの？」って言われた
のが一つのきっかけかなと思
います。元々こうに立たせてもら
うのも不思議な感じだと思っ
ていたのは、彫刻専攻ではなく
て、工芸専攻なのにならうとい
うところに入れられるというの
も今思えば不思議な感じはして
います。

司会 ありがとうございます。そうしたら
原さん、大学に入ってから今
まで続けている金工を選んだ理
由をお願いします。

原 金工を選んだ一番のスタートは隣
にお見えになる小島さんの卒
業制作です。1年生で入った時
にすでに卒業まで研究生とし
て残っていた学年の方で、(小
島さんの)卒業制作は卒業な
どの機会には見ていなかった
んですね。金工室の間に無造
作にポンって先輩の作品が置
いてあって、それは先輩の作
品だと知らなかったんですが、
絶滅危惧種の動物のタワーだ
ったんです。言い方が分から
ないですがそれを見て、こん
んなものが作れるんだらと、
すごく響いて、これだったら
やってみないかって思ったの
がまずはきっかけです。

金属自体は、私たちの(大学の)
時は3年生の途中で2つに選
択を絞るんですが、その時に
私はガラスと金工を選んでい
ました。どちらかと言うと、さ
っきの江村先輩の反対側に行
っちゃうんですが、用途を伴う
ものを手く作れなくて、順に
できてきたんですけども、な
のでどちらかという彫刻に近
いような仕事とかの方が自
分に合っているなと、そちら
ならできるかなという感じ
で作りたかったんですけど、
そういうものになっていたので
最終的に金工を選びました。

金工がいいのは即効性が無い
のがすごくあって、とにかく
工程が長いんですよ。いつも
いくつも素材を焚いては型を
作り変えて、最終的に金属へ
持っていくというゴールが
すごく遠いのが私にとっては
すごく大切で、昔大学にいた
時に(登壇者の)先輩たちと同
じ代の森岡知香さんというガ
ラスの先輩がいたんですが、
ガラスも型物と同じように工
程がたくさんありまして、
森岡さんはなんでガラスを
をやっているのかというと、「
子どもを育てるみたいな、
育てていくような感覚があ
るから」と、当時私たちが若
かったので子どもんか育て
たことがなかったんですけど
も、だから私はガラスをや
っているんだというのを話
してみても、すごい共感した
というか、私は子どもがとい
うよりは一つ一つ重ねていく
という風になっています。

原さん先ほど、気後れしていた
という部分があったので、自
分に自信がなくて、その自信
を補うために自分にちゃんと
層を置くというか、そうい
った仕事が私にはすごい合
っていたので、未だにそれを
大事にしています。そうす
うとやっぱり工芸に対する
こだわりというので、金属
工芸というものの技法を大
事にしたいと思っています。

司会 原さんのきっかけになった
小島さんの卒業制作は、壮
絶な卒業制作の過程だった
みたいですが、小島さんから
話してもらった方がいいか
、外から見ている江村先
生から小島さんの卒制につ
いて一言もらってから小島
さんが喋り始めた方が面白
いかなと思いますので…。

江村 本当に命を注ぎ込むように
目を真っ赤にしていた彼の
姿が忘れられません。それ
では小島さん。

司会 結構厳入りがりりまで作
業していたみたいですが…。



小島雅生(以下:小島)

小島です。卒業制作なんです
けども、教授にチェックして
もらう直前まで手で支えてい
ました。くっついてなくて(笑)
。そんな状況だったんです
けども、何を話したらいいか
というところなんですけども、
お二人が土を使ったり、金属
を使ったりということで素材
とか技法に向き合っている
ということですね。お知り合
いの方から面白くお話しし
てくれと言われたんですが、
この流れて面白く話してく
るために、プロダクトデザ
インや空間デザインみたい
なことをしながら仕事とし
て生きていきたいと思っ
ていました。

当時、愛知教育大学に総合
造形コースが出来まして、
江村さんとはその1期生なん
ですけど、愛教大に面白い
コースができたから、じゃあ
行ってみたいよと行ってみ
たら、先程の5つの工芸的な
分野の専門のコースだった
ので、「あれ？デザインは？」
と思いが、まず我々1期生
だから後輩の皆さんも何も
無い状況から、ものを作り
上げるための環境を準備す
るというのがすごく勉強に
なりました。

金属を溶かして鋳造するとい
うんですけど、鋳型という
型を作ってそこに金属を流
して成形するんですが、ま
ずは全然かたにならな
い。鋳型がバラバラになっ
てしまるところから始ま
って、出来上がるこの喜
びをそこで味わったか
も無い。

正直、大学に入るときは金属
の鋳造技法は全然知らない
ぐらいだったんですけど、
当時仲山先生という教授
からブロンズ(銅の合金)の
溶けた様を見せてもらいま
した。それは、太極の形を
覗くような美しさあって、
そこからずっと「素敵だ
な」と。しかも1200℃の
すごいエネルギーを秘めた
液体を型に注ぎ込む行為が、
あたるも作品に命を注ぎ込
むような、自分にとっては
儀式のような、そんな技
法だったので、そこから生
まれるものってすごく僕
にとってすごく好きにな
りました。

原さんが先ほど、すごい長い
工程を経て作るのが原さん
にはしっくりきてると言っ
ていたんですが、実は僕は
長いもの(工程)が苦手なん
なんです。だけどそんな僕
でも金属を溶かして【9】
型に流し込む【10】、す
ごく重いので、今椎間板
ヘルニアなんですけど…。
そんなきっかけで金属を
始めるようになったんです。

江村さん原さんもおっしゃ
ってんですけど、工芸的な
技法、素材を大事にして今
までのものを作ってきた
ら、僕は自分と自分が工
芸と言われることに対して、
申し訳ないぐらいの仕事
や作品だと思っただけです
ね。かと言って、彫刻
ってなんだろうって、それ
よりも僕にとっては溶か
した金属が命を吹き込ま
れたかたちになって、永
遠のものとして残るその
プロセスが、そういった
現象が僕の作品にとって
大事だったんですよ。

僕の作品【11】は訳わ
からないんですけど、これは
彫刻なのか工芸なのか分
からない。でも一つの空
間で僕の中で意味のある
かたちを配置して、一つ
の作品として表したい
という風に思っながら
制作しています。

これは最後まで僕が
語っていいのかな？途
中で切った方がいいのか
な？



【11】

江村 (手でどうぞ)

小島

ありがとうございます。す
だから、原さんは今ご自分
一人で格闘しながら金属を
溶かしてやっていらっし
やって、かたちになること
すごく難しいのやっています。
それを最終的に表面処理
して仕上げ、彫刻的な仕
事でありながらも工芸的な
仕事をさせている原さん
に対して、僕は(金属を)流
した時に出来たバリとか
型を押し分けて金属が流
れたバリとか、失敗と言
われる穴すらもその現象
の一つとして受け入れ
ながら展示をしている
ので、よく工芸の先生に
叱られていました。

これは【12】、九州の太
宰府天満宮のところで何
年前にあった国際アート
シンポジウムの作品で
す。世界各国のアーティスト
が集まるイベントでもそこ
には行かしてもらって、
9日間ぐらい滞在して
世界のアーティストと
関わって作品を最終
的に太宰府天満宮の中
で展示するというプロ
グラムに参加しまし
た。太宰府天満宮で
ブロンズを1200℃で
溶かして作るのは
ちょっと難しいので、
僕が展示していたのは
大きな楠木の森の中
で展示するんですけど、
ちょっと写真では
分かりづらくも
ないんですけど、見
えませんか？あれ
実は蠟燭の原料、
蝋なん



【12】

です。太宰府天満宮で
ひたすら作り続けて
いたのが、白い蜂の
ものなんですけど、
見えますか？あれ
実は蠟燭の原料、
蝋なん

僕も原さんも先
ほどの永江先生たち
も同じ粘土で彫刻
を作ったものを
型取りして、(僕
らは)それを蝋とい
う素材(ロウ原
型)に置き換
えて、それを型
にして、蝋を溶
かして出して、
溶けた空間に
金属を流す
非常に長い
仕事の仕
事なんです
けど、最終
的に金属
になる手
前の蝋を
一緒に展
示してしま
ったんす
ね。(鋳造
作品では)普
通は見て
はいけな
いと言わ
れている
ところな
んです
けど、や
はり世
界のアー
ティスト
と関わり
ながらこ
の空間で
僕がやれ
ること
って、金
属はもち
ろん違う
場所で作
ったもの
を持って
いたんす
けど、金
属は置き
換わる前
の蝋って
すごく
僕にとっ
て、触
れたら
割れて
ちやっ
と温度
が高い
と溶け
てしま
うもの
が、鋳
造とい
う工程
を経て
金属に
置き換
わると
永遠の
ものな
るんす
けど、
僕にと
っては
すごく
大事
で、僕
のもの
と永遠
のもの
を一緒
にどう
しても
展開し
たくて、
初め
て蝋を
出し
ちゃっ
た展
示です。

こういった文化財
のお蔵の中
でも金属
で作った
ものや浮
いてる
物が蝋
なんです
けど、お
水が張
ってあ
って風
で揺れ
るので、
風とか
(自然)現
象も自
分の作
品に取
り入れ
たいとい
う風に
意識が
どん
どん
変わっ
ていま
した【13】。



【13】

2019年、豊橋の
アートプロ
ジェクト
でお世
話にな
ったも
のなん
です
けど、
ちよっ
と見
えな
いん
です
が、こ
こで
は金
属
と蝋
を配
置し
まし
た【14】。
左側
にニ
ョキ
ニョ
キと
3つ
立っ
てい
て、
右側
にテ
ント
っぽ
く
な
っ
て
い
る
の
が
見
え
ま
す
か
ね【15】。
これ
自然
木な
ん
です
が、
初
め
で
自
然
素
材
す
ら
も
作
品
に
取
り
入
れ
て
し
ま
い
ま
し
た
。こ
れ
は
実
は
こ
の
枝
を
使
わ
な
き
や
い
け
ない
想
い
が
あ
っ
た
ん
す
けど、
(別
の機
会に)
荒
れた
山
を
切
り
開
いて
新
しい
森
を
生
み
出
す
ア
ー
ト
プ
ロ
ジ
ェ
ク
ト
に
参
加
し
て、
そ
こ
で
切
ら
れ
た
枝
を
使
っ
た
ん
す
ね、
それ
を
岐
阜
の
山
奥
か
ら
運
れ
て



【14】



【15】

きて、ここで新たな命の森を作ろうという気持ちで作ったので、どの枝でもいいわけじゃなくて、そこで切られた枝に意味があったというように金属というもの、鍛造というものを大切にしながら、今日の前にあるものを受け入れるようになってきました。到着地点が分からなくな。とりあえず切ります。

司会 え?そうなんですか?用意しなかったな(笑)。

江村 しゃべろるか?

司会 すいません。それが一番いいです。

江村 僕から始めて、小鳥さん?「さん」って言いづらいね(笑)。原さんも苦手なことを積み重ねていってということだったし、小鳥さんも本当なら見せるべきところはない途中の過程の蠟を、その蠟が本当は金属に置き換わるんだけどその蠟を見せるということに作品にしていってということ言えば、素材というものを通しながら出来上がっていく過程そのものと向き合っている自分が自分で、その素材が自分で合ったと、素材と向き合っているものを大事に作っている。

それが僕なんかは工芸のプローチ的だというのがすごく今お話を聞きながら感じていて、そうやっていくうちに小鳥も「分かんなくなってきた」というのは、たぶん、じゃあ自分は一体これから何を表現していくのだろうかという、ある意味迷っているんだけどそれが楽しいという僕も小鳥もそうですけど、不思議なことに大学で学生にもものを教えるなんていう偉そうなことをしているんですけど、図工が苦手とか、美術があまり好きじゃない学生が多いのは、なんでだろうって考えた時にやっぱり、どうしても出来上がった作品ばかりを評価されて、それがすごく嫌ということになって嫌になったんだという話を聞くと、僕らが今やっている出来上がる前の過程そのものが一番楽しいのと思っているので、そういったことを僕は作りながら伝えたいなと思っているんじゃないかなって、その過程こそを見て見せることは作品じゃないパフォーマンスみたいなものでも作品になりうるのかなっていう風には思います。そうすると次の第3部につながるのではないかと。

司会 すごい、次のことまで考えてくださってありがとうございます。本来何も言わない方がいいんですが…。この第2部は、江村さんに器などの日常に入り込んだ制作物から話し始めていただいて、原さんや小鳥さんも、日常に入り込むものじゃないオブジェ的なものや社会に入っていくような展覧会だったりするところで意味を持たせるような制作をされていることを知っていたことができたと思います。江村先生をつくる恐竜やロボットのこと、原さんや小鳥さんの制作テーマまで掘り下げていくともっと楽しいのですが、全然時間が無くなっちゃいますので、「素材」にまつわる魅力などのお話でした。

そもそも焼き物でもガラスや金属でも、器だったりカトラリーだったり、用途を成せば成すほど日常に入り込み、多くの人の身の回りに存在しているんですけど、同じ素材でつくられていても第2部の皆さんは緑遠いと思われてしまう芸術とは何なのか、第2部の皆さんがつくるようなオブジェ的な作品だったり、プロムナードの彫刻だったりする状況の芸術が日常に入り込み社会と交わる時って何なんだろうという話を第3部「芸術と社会について」というテーマで、1人は会場で、1人はフランスと回線をつないで話をしたいと思っています。ここでは素材にまつわるお話を3名の方にさせていただき、第3部へ繋いでいただきました。ありがとうございます。



第3部：加藤マンヤ、篠田美有 司会：山本辰典 [1]

山本辰典(以下:司会)

1部2部と続けてきましたが、続きまして第3部「芸術と社会について」ということで進めさせていただきます[1]。会場にある車のボンネットの上に色鉛筆が並べてある作品の加藤マンヤさんです。それからギャラリーに入って左手すぐにある4点の絵画作品の篠田美有さんです。

先程まで作った物が社会に交わるかという部分が見え隠れしている部分があったんですけども、そもそもマンヤさんの作品からスタートさせていただくと、何歳の時の作品かわかりませんが、この前田ポストン美術館の展覧会で出していた信号機の作品とか日常の既製品を変化させて作品づくりをされているので、その辺の社会とマンヤさんの作品みたいなところを、ちょっとフワつとしてさせていただきます。

加藤マンヤ(以下:マンヤ)

今日3人目の加藤なんで、「加藤だけだぞこは」と思うかもしれませんがご勘弁ください。

言葉だけでは私の作品は理解できないというか、イメージしづらいと思うんですけど、山本くんが喋っていた信号機の作品[2]というのは、歩行者用の信号機があって、それが赤と青が交互に点滅している仕組みの作品なんです。そうならないと青なのか赤なのかどっちなんだろうと人は立ち止まってしまっ「結局赤じゃん」みたいなことが言いたいという。ちょっとそういうトンチみたいなことを作品に入れ込んでいます。これは一体何を言おうとしているのか全然分らないというじゃなくて、「ああ、これはパケツだな」とか「これは電車だな」とか分かるような、日常にあるものをモチーフにして作品を作るということをやっています。

1部2部を通して聞いていたんですが、司会の山本くんは一体何者なんだろうということで、自己紹介してないよね?

司会 1回もしてないですね(笑)。別にいいかと思っていたんですけどした方がいいですかね?

マンヤ ずっと聞いてくださる方々のためには。

司会 すいません。登壇してくださった参加作家の皆様と一緒に出展をされていて、リハーサル室で映像の作品を出していましたが、今日は司会なのであまり喋らないようにということで進めてきましたが、今日はいいところですよ。お願いします。

マンヤ 社会ということ意識して作品を作っているわけではないんですけども、美術っていうものをあんまり根本的には信賴していないところがあって、特に芸術とか、先程の加藤真也さんの話の中で「彫刻作品が人々に触れられる」という意見がありましたね。僕はタバコを吸う人なのでちょっと外に出てタバコを吸っていたら、別に輪除するわけじゃないんですけど、面白い看板を見つけて「これは芸術作品のため触れないでください。」と書かれていたの…。

会場 ハハハハ(笑)

マンヤ 芸術作品は触れていい作品と触れちゃいけない作品とあるんですけど、露骨な書き方に僕は結構ツボが入ってまして、その看板自体を作品にしたいなと思うようなものの方を考へていて作品を作っているんですけど、なので社会というわけじゃないんですけど、日常の中に実際にあたり前にあるものをちよと捻る事によって全然違ったものに見えてくるというか、違うものとして浮かび上がってくるというようなことを、一番自分の作品を作るときにスタイルにしています。

司会 ありがとうございます。付け加えることなく、マンヤさんがそういう作家さんだということ、篠田さん聞えますか?篠田さんは彫刻とか立体作品が多い今回の展覧会の中で絵画制作、ペインターでですけども、最近フランスでやっている仕事を紹介していただけました。

篠田美有(以下:篠田)

私はフランスにいますんですけども、なんでフランスに住んでいるかという、夫の仕事の関係で住んでいます。その中で私は大学時代も絵をずっと描いてきて、彫刻研究室にいる傍でも絵を描いてきて、今も絵を描いています。

(最近)絵を描いているものも認知されてきて、昨年から(フランスは)1年ぐらいロックダウンで今もそんな状態が続いているんですけども、レストランの壁面[3]だったり、シャンパーニュのエチケットパッケージ[4]の依頼があったり、絵を提供しました。

司会 レストランの絵はどんな感じに仕事をしたのか、もう少し具体的に。



[3]

篠田 ちょうどロックダウンの解除がされるまでレストランが営業できないという時に、「この壁、まだ何も無い状態じゃ鬱陶気が暗いから、ここを明るくしてほしい」ということで、(店の方々が)気持ち新たに再出発したいという壁面を描いて言われました。普段だったらレストランは営業しているんですけど、閉まっていた時に10日間ぐらい描きました。シェフの方にお願いされて…。

司会 10日間どれくらい量を仕上げたのかは?

篠田 (横)5mぐらいで、(縦)1mぐらいのカウンターの上で、照明の当たらない暗い場所です。

司会 実制作のキャンパスよりも大きいところに描かせてもらったということで、絵が飛び出して仕事をされたわけで、それも社会と繋がるといこともありますが、お二人とも海外生活をしながら、海外でのアーティスト活動をしているというところも、マンヤさんの場合は、20年前ぐらいにイギリスで生活しながらアーティスト活動していたというところで、マンヤさんにはイギリスの場合、(社会からの)アーティストの捉えられ方を話していただければと思います。

マンヤ イギリスに行ったのは、愛知県から助成金を貰ってイギリスに行ったら、「芸術の勉強をしておいで、こんだけ(予算)あげるからね」って行ったんで、結構生活的には楽というほどではないですが生活できるぐらいでした。当時小学生の子どもがいて、一緒に連れて行ってたんですけども、割と印象的に覚えているのが、小学校の送り迎えに行ったりすると、子ども達が出てくるまでの間は親が待っているんで、日本で言う保育園のお迎えのようなものですが、小学校のお迎えを待っている時に全然知らない父兄から「お前見かけない東洋人だ何をやっているんだ?」って聞かれて、「今僕は大学院に行っていて、アートの勉強をしているんだ」って言うところ「アートなのか?」「お前はどんな作品を作るんだ?」って聞かれるので「こんな作品だ」って、非常に興味を持って。例えは、これを日本で置き換えた時に「誰かのお父さん仕事何やっていますか?」「作品を作っていますか?」「うわ、すごい芸術家なんだ〜」っていうことすごく起きると思うんですけど、「芸

術家なんだぞーい、私たちが住む世界が違うんだー」以上終了。っていうことが割と起きるんですけども、でもそうじゃなくて「どんな作品なの?」「どういうところで見せるの?」「いくらになるの?」「それで食べていけるの?」そういう下世話なところとか、アートを身近なものとして捉えていたりするんですけども、ヨーロッパではよくわかるんですけども、職業に良い悪いが無いのは向こうでも同じなんですけど、人と一番優れている職業、〜istの中で一番優れているのが詩人だと書かれていて、それと同様の立場でクリエイター、芸術家がいると向こうでは言われていました。なのでそういう意味で人々がアートに憧れているところがあると思いますが、憧れているからといって自分たちと全然違う雲の上の世界の話として捉えてはいないなと思ったのは、僕が向こうに行った時の実感、印象です。フランスはどうですか?

篠田 フランスも同じような感じで、(日本だと)アーティストって言う別次元を生きているような見られ方をする経験が作品を作っていたらあると思うんですけど、でも職業としてあるという認識がされていると思います。

マンヤ 海外だと、物を作るという時にどうしてそういう物を作るのか、何を考へているのか?ということにすごく重きを置かれるんじゃないかな?

篠田 日本だと展示して、見た目とか技術とかを「すごいねー」、「分らない」とか言われるんですけど、こっちだと結構バイオグラフィだとかスライドメントをちゃんと見られると思います。哲学的な部分を少し見ると思うので、それは欠かせないと思います。

司会 篠田さん、現在はそっちに行っちゃったんですけども、なかなか分らないかもしれないですけども、もちろんフランスに行く前は日本に絵を描いていたわけで、マンヤさんはイギリスから帰ってきて長いんですけど、行ってた時から帰ってきた時にギャップってありましたか?日本とはアーティストが違う立ち位置でいうことでしょうか?ということ(海外)から日本に帰ってきたら…。

マンヤ 35歳の時に向こうへ行きましたが、35歳になって一応学生と言いつながら、アート学生なんて作品を作っているだけなので、大学院へ行って作品をずっと作っていることでした。朝から晩まで、365日ずっと作品を作っているということと2年間やって日本に帰ってきた時に、まじびっくりするの、[町内会の役員をやった]とか、「年男の時にサボったから地元のお祭りとか神社の役をやった」と言われて、凄まじく現実と引き戻されたというのを覚えています。それは全然質問とは違うんですけど、何を答えればいいんでしょう?

司会 アーティストとしていられたらいいかな?

マンヤ そこは多分変わらないと思います。それは自分の(気の)持ち方、気持ちの問題なので、ただ向こうにいるときもこっちに帰ってきてても同じなんですけど、やっぱり自分が作品を発表する機会というのが向こうも日本に帰ってきてからでもあったので、そういう意味では、誰か見てくれている人がいて、自分がそれを作るところでそんなギャップという大きな差はないかもしれない。

司会 篠田さんへ行く前に、マンヤさんご数年、イギリスで活動していたのは別にレジデンスなんかで別の国で作品発表する機会があったと思いますが、そういうところなんかも含めていただけると。

マンヤ ここ何年かで2回ほどイタリアに滞在制作することがあったんですけど、その時にすごく思ったのが、先程もちょっと触れましたがアートというものが身近なので、特にイタリアというのは本当に身近に色々な芸術があるし、立派な建築もいっぱいあるし、びっぴりするような教会が小さな街の中にもいっぱいあったりして、そういう歴史があるの、やっぱり美しいもの綺麗なものだから、そこから荘厳なもの、そして人々に興味を持たせるようなものには「これ何?」というようになると。日本でも我々が作っている子ども達が寄ってくるみたいな感じで、(イタリアでは)大人が寄ってきて「これ何やっているの?」「これ何になるの?」「どうしてそういう形になっているの?」とかすごく聞いてくるというのは、向こうに行くと感じた、特にイタリアで強く感じたことです。

篠田 マンヤ先生が言ってくださったようにイタリアはアートと生活が身近という話があったんですが、よく最近日本でトリエンナーレとか聞くとと思うんですけど、それもイタリア語ですよね？それで今私が住んでいるリヨンという街には、2年に一度アートの芸術祭、アートのお祭りをやっている、ダンスとアートを交互でやっているんですけど、それは2年おきなのでビエンナーレ、アートのビエンナーレをやっている、街としてもそれをもう10年くらい続けていて、私も4回行ってますが、そういう取組みも街の中であつたりして、市民にはアートが身近だと思えます。

司会 リヨンで他にそんなような活動が紹介できますか？

篠田 リヨンはいろいろ有名なところがあるんですね。1年に1回光の祭典という電飾のアートのお祭りがあつたりとか、あととても有名なのが、だまし絵でも大きなだまし絵が町の至所にあるんですけど、「Mur des Canuts (ミュール・デ・カニユ) リヨンの絹織物工たちの壁」^[5]っていうこれは1200平米の建物に描かれた大きな壁画で、これは30年以上前からこの場所で描かれていて、何度も描き直された壁画もあれば、ヨーロッパでも最大の壁画があつたり、これはだまし絵なんです、実際には窓が描かれていても窓は無く、町の様子をだまし絵の中に描かれていて、他には街の図書館とか、リヨンの人々のフレスコ画「Fresque des Lyonnais (フレスク・デ・リオネ) リヨンの人々のフレスコ画」とか「Fresque [La bibliothèque de la cité] (フレスク [ラ・ビブリオテック・シテ]) フレスコ画 [図書館]」とかがあります。



[5]

司会 どうして始まったか知ってますか？

篠田 40年くらい前に当時の美大の教育方針に反対していた人たちが始めた活動だったんですけど、そういう団体から来ています。その壁になぜ描かれたかという、元々、企業が何かか広告を埋めて街の人々に宣伝をしたというので始まったんですけど、今は広告は一切無くなって、もう壁画オンリーになりました。

司会 40年近く続けてきたことで、社会的な影響って何かありますか？

篠田 リヨンはオリンピックリオネと言って、サッカーも強いですし、お祭りを色々やったりとか美食の街だったりして、別にアートやだまし絵を覗にくるという訳じゃなく、観光客や留学生も多いのでそういった色々な目的で来た人たちに街の魅力を伝えているんだと思います。その壁画の中でも子ども達が大人になっていったり、今の有名人、レストランのシェフとかを描いたり、そういう街の様子を伝えていますね。こんな街ですよーと。

司会 街を形成する1つであるということですね。今に至るまで知立のpromenade展も20年行われてきたわけですけど、まだまだ知立市というのは駅前の開発だとか街がつくり変わって発展していくという状況の真只中にあるので、芸術文化が何か影響を及ぼす可能性を見据えている状況かもしれません。その辺も含めて今後プロムナード展も続いていくし、20周年を迎えたいけどこれから再スタートして



21、25、30周年と続いていくと思います。

街中に芸術が出ていくところ、時間も時間なので最後にアーティストの社会的役割みたいなのをマンヤさんの主観になっちゃうかもしれませんが、言っていただけなら…。

マンヤ これは僕の意見でしかありませんが、「私はアーティストです。」という事は簡単なんですけども、本当にアーティストであるという為には、社会に影響を及ぼしたりだとか重要だと思ってるんで、どのようにアプローチするかというのはそれぞれのアーティストによって違うので、こういうアプローチの仕方、あるいはアプローチの仕方っていうのはあると思うけども、今回のプロムナード記念展なんかでも自分は(プロムナード展) 第2回目の時に並べて、その時とは状況が変わってきていると思う。

なぜかという、今回見ててフォトコンテストの応募者がすごい多いけども、先ほど紹介されていた清掃活動で作品を耐水ペーパーで磨いてピカピカにするだとかを実際に体験することが重要で、ああいうことがどんどん広まっていくことで、アートというものがた降りてくるとかじゃなくて、みんな同じ、一般の人たちと同じという基準にアートが入ってきて、例えば駅前に行くとかタクシーが停まっている、鳩が飛んでいるのと同じようにアート作品があるというのが文化になっていくんじゃないかと。そうじゃないと単に変なものがあるということになって、変なものがすぐく変なもの、そんなものがあるなら勿体ないという事から、そういう形で市民の中に入っていかないと、市民がしっかり認知して、それで初めて社会性があり、アーティストの伝えたいことというのが、まあ、どういふかたちかは分からないけども、市民の中に定着していくんじゃないかなという風に思っています。だから、「アートが発信」というよりも、「市民とアートが常に同時に双方向で関係し合う」というようなことが一番いい状況なんじゃないかと思えます。

司会 相互作用というところという、マンヤさんが2回目の際に出して、5周年のシンポジウムのパネリストで登壇して、企画とかもやっておられるかもしれませんが、10周年も出されたりして、そういうような相互作用の強みという変化を感じたということですね。この20周年を迎えて。

マンヤ そうですね。まだまだこれから変化していくと思いますし、それこそSNSだとかでどんどん発信したり、今もインスタライブが流れているのかな？そういうことで、例えば美術館に行かないと観られないとか、そういうことではない普通にもっと簡単にアートにアクセスできるような美術でもいいんですよ。人々の生活の中にちゃんと必要なものとして、ちゃんと根ざしていくことというのが大事かなと思います。だからさっきの美有さんの、Barのカウンターの奥に絵を描くこととか、「この絵素敵だね」そういうことからいいと思うけど。社会との関わりということ言えば、これは僕の一個人的な意見ですが。

司会 ありがとうございます。彫刻だけでない芸術文化が入り込んだ街づくりがまだまだ知立市で行われていくことを期待もしますし、多分そうなんだろうなと思います。これで1部2部3部と続けてきた作家さん、作り手の口から何か思うことを発信？というか、話していたことの中から気づいていただけたらなと思って続けてきました。その部分マンヤさんも長く知立市の芸術による街づくりに関わってきたのだと思いますが、もっともっと長くゼロからやってこられた宇納先生なんかまた違う思い、思われ方をされてるんじゃないかと思うので、これで最後、閉会の宇納先生の挨拶へトバンタッチして僕らのトークイベントを終わりたいと思います。長い時間、最後までありがとうございました。

「オリジナル缶バッジをつくらう！」

日程 | 2021年2月13日 [土] 10:00-15:00

会場 | エントランスホール

講師 | 長谷川 厚一郎氏 (愛知教育大学 非常勤講師)

対象 | どなたでも

オリジナルの缶バッジをつくるワークショップを開催しました。自由に絵を描いたり、ペキトの写真を入れたり…思い思いの缶バッジを家族や友だちと一緒に制作しました。参加者により、200個以上の作品が制作されました。



好きな色の台紙を選ぶ



台紙に絵を描く



シールを貼ったり、ペンで色付けをする



缶バッジ制作風景



長谷川先生から缶バッジの加工方法を指導してもらう



完成

「やきもの恐竜をつくろう」

日程 | 2021年2月13日[土] 10:00-12:00

会場 | 工芸室

講師 | 江村 和彦氏 (日本福祉大学 教育・心理学部 准教授)

対象 | 小学生 10名 (事前申込者)

粘土を使って、自分の想像した恐竜をつくるワークショップを開催しました。講師の先生と一緒に、図鑑やフィギュアを参考にしながら、自らのイメージする恐竜の姿を表現した作品を制作しました。

【講師 コメント】

参加した子どもたちは、始まる前からどんな恐竜にしたいかイメージを持っていました。図鑑を片手に取り組んだり、ジオラマのように木や卵などもつくり世界観をつくりだそうとしたり、それぞれの子どもも熱量を感じました。何より真剣につくる子どもの眼差しに、つくることの原点を見ることができました。



江村先生による制作工程の説明



足やしっぽを作る



ツノをつける



制作風景



江村先生に相談



完成



焼成後の作品

「言の葉のカタチ」

日程 | 2021年2月13日[土] 13:30-16:00

会場 | 工芸室

講師 | 小島 雅生氏 (東海学園大学教育学部 教授)

対象 | 小学4年生~大人 10名 (事前申込者)

金属素材を使った造形体験ができるワークショップを開催しました。講師の先生と一緒に、葉形の銅板に絵や言葉を描く方法やアルミ線を使ったおしゃれな飾りの作り方を学びながら、オリジナルの作品を制作しました。

【講師 コメント】

造形素材としての金属、そしてその素材を活かした技法。それらに触れ、体感し、造形活動を楽しみました。さらに、大切なひとやこと、今の気持ちを考えながら、それぞれの思いのこもった作品を制作しました。参加者の皆さんと、心から向き合う造形表現を共有でき幸せでした。



小島先生による制作工程の説明



アルミ線を加工する



小島先生に相談



図案を銅板に転写する



銅板に模様を描く



銅板を磨く



銅板とアルミ線の飾りを組み立てたら完成

野外彫刻清掃

日時 | 2020年10月3日[土] 9:30-11:00
 場所 | 知立市図書館・公園通線周辺
 参加者 | 25名

知立市内に設置されている彫刻作品を磨く活動を通して、作品や野外彫刻のある風景への愛着、芸術への関心を持つきっかけとなることを願い彫刻清掃活動を実施しました。市民の方をはじめ愛教大の卒業生や行政の方など25名の参加者で、知立市図書館、公園通線周辺の彫刻11点をきれいに再生させ、周辺の草刈りやゴミ拾いを実施しました。

作品に触れ、長年の汚れを落とす作業を通し、彫刻作品へのさらなる愛着を感じてもらえたと同時に、作品がきれいになったことで、参加者の方々に限らず、多くの方々に改めて作品をよく観てもらえかけづくりができました。



はじめに、野外彫刻プロムナード展振興運営委員会の顧問である宇納一公氏より、作品の磨き方を学びました。



大理石の作品は、水と耐水ペーパーを使って磨きます。



まずは粗い番手の耐水ペーパーを使用し、最後は2000番の番手で丁寧に磨きます。



磨きすぎないように、注意しながら作業を進めています。



大きい作品も、くると優しくこすることで、みるみるうちに汚れが落ち、大理石本来の白さを取り戻していくのがわかります。



前回の彫刻清掃から数年が経ち、うっすらとよごれが付着していましたが、久々に磨いてもらい、作品「かばのもわもわ」も満足そうです。



清掃前と清掃後の「ハッコヨイ」です。茶色のよごれが目立っていましたが、真っ白・ピカピカになり、とても嬉しそうです。



今回の清掃活動は、20周年記念事業の一環で実施し、記念品をお渡ししました。愛知教育大学彫刻研究室の永江先生に制作していただいた焼き物マグネットです。「池鯉鮒にコイ」というテーマで、鯉をかたどった可愛い焼き物になっています。



お疲れさまでした。彫刻清掃活動にご参加いただき、ありがとうございました。今後も、多くの皆さまのご参加をお待ちしております。

おわりに

事業総括

21年前に知立市文化会館の開館と時を同じくして野外彫刻プロムナード展は始まりました。その間、駅前イルミネーションや空き店舗活用美術出前講座、ガラスアート博覧会や5年毎の節目には記念美術展や講演会などで愛知教育大学の学生たちと知立市のまちづくりに関わってきました。

今回、20周年記念事業をするにあたり一番の心配事は、日本をはじめ刻々と世界中の国々が新型コロナウイルスの感染拡大により日常生活が変化していくことでした。

厳しい状況下の中で、展示会の企画ではどのくらいの作家の方々が参加していただけるのか、フォトコンテストの公募では市民の反応はどうか、小中学校での出前講座は理解していただけるのか、ワークショップやセレモニーやトークイベントは実施できるのか等々、まったく予測ができず正直緊急事態宣言が繰り返されるたびに事業中止の言葉が出そうになりました。そんな中でも実行委員の方々はりもくとソーシャルディスタンス対策をしながら前向きに取り組み準備を進めてきました。

この20周年記念の事業が完遂出来た事は幸運以外にないと思われるほどでしたがすべての事業が無事出来たことは、スタッフをはじめ多大な協力をいただいた関係諸氏のお蔭と深く感謝申し上げます。多くの人の力を結集しなくては成しえないことばかりで、それぞれの技量と人間性を信頼し力を合わせればどんなことでも出来ると改めてこの事業の成果を認識しました。

野外彫刻プロムナード展振興運営委員会 顧問 宇納 一公
(愛知教育大学名誉教授)

都市整備部と野外彫刻プロムナード事業のこれから

本市では、市民が日常的にまちの中で芸術文化にふれあい、目にするのできる街並みを創出することをめざして、彫刻のある風景づくりを進めています。

平成12年から続く野外彫刻プロムナード展も多くの方々に支えられながら20周年を迎え、野外彫刻プロムナード20周年記念事業は、「彫刻と“もっとふれあう”出会いづくり」のテーマのもと、多くの方々に芸術をより身近に感じてもらうことができました。20周年記念事業でご協力いただきました全ての皆さまに心より感謝申し上げます。

暮らしの中にある身近な芸術は、心の豊かさをもたらす“彩り”となると考えています。野外彫刻プロムナード展はそんな“彩り”をまちづくりにとりいれる画期的な事業です。平成12年から続くこの事業を継続して行っていくべく、今後とも市民や民間、県内芸術系大学の皆さまとの協働のもと励んでまいります。また、現在、知立駅周辺では、連続立体交差事業を中心とする新たなまちづくりが進められており、知立の玄関口として、魅力ある顔づくりが求められています。今後も芸術文化にふれあうことができる、知立の特色ある風景づくりを図っていく所存です。関係の皆さまはじめ、引き続き、お力添え頂けますよう、よろしく願い申し上げます。

知立市 都市整備部長 高木 清充



中学校で出前授業の打ち合わせ

2020.6.17



彫刻清掃の記念品作成

2020.9.1



セレモニーでのあいさつ

2021.2.11



プロムナード展のあゆみの展示準備

2021.1.26



フォトコンテストの展示準備

2021.2.2

野外彫刻プロムナード事業の20年を振り返って

野外彫刻プロムナード展20周年おめでとうございます。私のような、芸術とは縁もゆかりもない生活をしてきた者が、2005年頃から、長く、この取り組みに関わりを持たせていただくことができたことについては、関係各位への感謝の思いでいっぱいです。

私にとっては、芸術とは空気のようなものと感じています。彫刻について、何故とか何とかが聞かれても、一切答えられません。でも、例えばカラオケやBGMで音楽が愛されているのと同様に、何気ない日常や忘れたい思い出の中に、もし、普通に彫刻があったとしたら、とても素晴らしいことだと思っています。

野外彫刻プロムナード展をとおして、一人でも多くの市民の皆様にも、空気(野外彫刻)がなくてはならないものだったことを感じていただけたら幸いと、今後もどういう形であれ、関わっていきたくと思っています。

野外彫刻プロムナード展振興運営委員会 監事 伊藤 嘉邦

20周年記念展を振り返って

野外彫刻プロムナード展に関わらせていただくようになって、15年が経ちました。これまで、野外彫刻プロムナード展出品者、知立市都市計画課の方々、パティオや地域の方々など、様々な方と出会ってきました。今回の20周年記念事業では実行委員の一人として参加することになり、貴重な機会となりました。記念展開催にあたって、宇納先生や出品者の方々、都市計画課のみなさんのおかげで無事乗り切ることができました。

今回の展示会は、「20th PHASE 芸術は出会いからはじまる」をタイトルとしましたが、私にとって、プロムナード展は「出会い」なんだと気づきました。大学生の頃に先生や先輩方、後輩たちに出会い、それが年月を経てこの記念展につながっていたのだと実感しました。「出会い」とはある一点のことではなく、出会ってから現在まで、そして未来につながっている線だと思います。ある人とある人が出会って線ができ、またそれが様々な人との線になって、次の「出会い」に広がっていくのではないのでしょうか。野外彫刻プロムナード展が、今後も新たな出会いのきっかけの場になっていくことを願っています。

野外彫刻プロムナード20周年記念事業実行委員会 梅本 洋子

今後の行政との連携についての希望、意気込み

今回の20周年記念展が行われた令和2年度は、新型コロナウイルスの影響により激動の年となりました。本事業の開催も危ぶまれましたが、行政主導のもと、市民とアーティストが関わりながらの活動が企画、実施されてきました。そのため、過去の記念展以上に市民や行政と街に点在する彫刻や作家との関係に相互作用を及ぼす機会となり、「野外彫刻プロムナード展」がより皆様の身近なものになったのではないかと感じております。

社会情勢、時代の変化により大きな規模で人々の生活様式、価値観は変わっていきます。プロムナード展が20周年を迎えるまでも大きな社会の変化がいくつもありました。また、知立市においては駅前の再開発などにより街のかたちが大きく変わろうとしています。そのような中で求められる芸術も変化していくものだと私は思います。彫刻だけでなく、複合的な芸術が知立市と交わることで、新たな文化を形成していき、他の市町村とは違う魅力的な街づくりがこれからも行われていくことを期待します。そこに1人のアーティストとして尽力できたら幸いです。

野外彫刻プロムナード20周年記念事業実行委員会 山本 辰典

野外彫刻プロムナード事業に携わって学んだこと、今後活かしていきたいこと

私は、入庁から4年間、野外彫刻プロムナード事業に携わらせていただきました。事業を通して感じたことは、たくさんの出会いや学びがあったということです。それは、彫刻という作品だけでなく、作家さんや事業にご支援いただく皆様との出会いもあり、この事業は多くの人に支えられ、20年という時を越えて続いているのだと実感いたしました。

芸術に関心を寄せるきっかけは、記念展のタイトル「芸術は出会いからはじまる」に尽きると考えています。市内における彫刻作品との出会いの場は、野外彫刻プロムナード展だけでなく、公園や遊歩道等に点在しており、知立市の魅力あるまちなみのひとつとなっています。より多くの方に芸術を身近に感じていただき、関心を寄せていただけると嬉しいです。

これまでの貴重な経験をもとに、知立市の魅力を改めて認識し、活かしていくという気持ちを持って、次世代にも繋がるようなまちづくりに努めていきたいと思っています。

知立市 都市計画課都市企画係 主事(R2) 藤本 佳織

記念展準備の様子



記念展搬入時のあいさつ 2021.2.7



飾り付けの様子 2021.2.7



屋外作品の設置 2021.2.7



セレモニーの打ち合わせ 2021.2.11



ワークショップ受付の様子 2021.2.13



出品者の自己紹介 2021.2.14

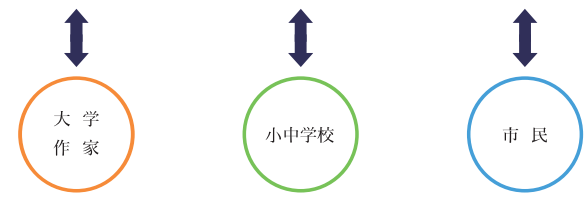
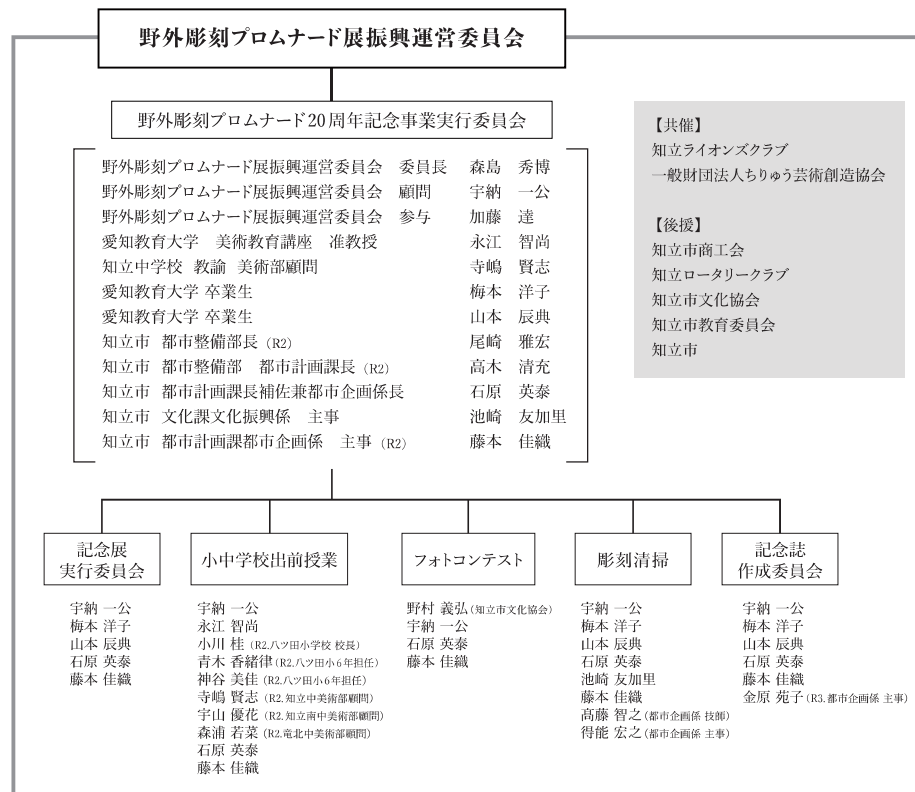


搬出・片付けの様子 2021.2.14



都市計画課職員一同の紹介 2021.2.14

野外彫刻プロムナード20周年記念事業実行委員会・組織図



記念事業実行委員会の打ち合わせ 2020.7.14



振興運営委員会の打ち合わせ 2020.10.28



記念誌の編集会議 2021.3.19